
魔法少女リリカルなのは 魔法と怪盗とオタクと

蒼零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 魔法と怪盗とオタクと

【Nコード】

N0780J

【作者名】

蒼零

【あらすじ】

気が付いたら知らない廃工場に居た

え？どこ？それとあんたら誰？

そんな感じで始まるリリなの小説です。

第一話「廃工場と黒服と俺と」(前書き)

初めての二次小説です。

駄文で駄文な駄文だけの小説ですがよろしく願います。

第一話「廃工場と黒服と俺と」

それはほんの一瞬の事だった

大学が長期休暇に入った為朝から大好きなアニソンを聞きながらネトゲをやっていた筈だ

なのにここはどこだ？

どっかの廃工場みたいだけど何故俺がここに居る？

ていうか何か頭がクラクラするし

「誰だお前は！」

声が出たので振り返ってみたらいかにも悪そうな

というか明らかに目つきの悪い黒服の人達がそこに居た

お前からこそ誰だよ

第一話「廃工場と黒服と俺と」

あの後現状を理解仕切れてない俺は黒服達に捕まり

どこにあっただのか丈夫な縄でグルグルに縛られてしまった

「おまえあいつの仲間か？」

黒服の一人が聞いてくるがあいつって誰だよ

とつつこみたかったが両手両足は縛られているから動けないし

なにより目の前に拳銃があったらそんなこと言えないよね、うん。

もとより口がテープか何かで塞がれてたので喋れないが

とりあえずどっかの誰かと勘違いされて殺されるのは嫌なので首を横に振り否定を示す

「嘘を吐くな、こんなところにガキが居るわけないだろ！」

聞いというて全否定かよ！

「俺らの姿を見られたからには生かしちゃおけねえ」

カチャリと拳銃の安全装置を外し俺に狙いを定める

ああ、俺死ぬんだな

まだやりたい事あったのになあ、特にネットゲ関係で、あつ！予約してたゲームどうしょ

せっかくバイトで金稼いで予約したのにあれ限定版だから一万以上したのに…

「じゃあな、怨むならあいつを怨みな」

黒服が引き金を引く瞬間だった

カランと少し離れた所で何かが転がる音がしたので黒服達と一緒にそちらに目をやる

そこには拳ぐらいの金属の球が転がっているだけだった

なんだろと見ていると球体が輝きだし一瞬にして俺達を含めて辺りを白い光で塗りつぶした

うお！まぶしっ！

「なんだこの光は！」

どうやら黒服達も予想外の事態らしく慌てている

中にはどっかの大佐みたいに目があ、目があと叫んでいる始末

そんな中不意に自分の体が宙に浮く

というより誰かに担がれているようだ
少しだが視力も戻り担いでいる人物を見ようとするとするが
縛られたまま担がれている為ちゃんと見れない
せいぜい見れるのは黒服達から遠ざかる風景ぐらいだろうか
黒服達も視力が戻ったのか俺を探すが当然俺はいない

「いたぞ！あそこだ！」

黒服の一人が俺が連れ去られるのを見つけ銃を向ける
他の奴らも銃口を向け撃とうとする
やばっ！などと思っていると黒服と俺たちの間にさっきと同じ金属
の球が現れる

どうやら俺を担いでいる人物が投げ込んだのだろう
さっきみたいに目をやられたくないので出来る限り顔を背け目を瞑る
わずかに光を感じるが先ほどではない
黒服達はまさか同じ手が来るとは思わなかったのかまた目をやられ
たらしい
といってもかなり離れた為分からないが大佐もどきがまた叫んでい
るのでおそらくそうだろう
というかわざとだろそれ

「くそっ！どこだ！」

黒服達は叫びながら撃ってくる
しかしまだ視力が戻っていないのかあらぬ方向に撃っている
俺に当たるならまだしも仲間の黒服に当たったらどうすんだ

「しっぺやー！」

訂正どうやら当たったみたいだ
多分大佐もどきだと思う

第一話「廃工場と黒服と俺と」（後書き）

まず最初に一言

ごめんなさい、なのは達は当分先です。
更に言うと更新遅いです

いたっ！石投げんな！
尖ったのはマジ危ないからやめて！

第二話「紅髪と泥棒と死亡フラグと」(前書き)

みなさん明けましておめでとーございます。

といつてももう一月下旬ですけどね

更新がとても遅くてすみません

第二話「紅髪と泥棒と死亡フラグと」

あのあとまた閃光弾を使い姿をくらまして今は工場の端に隠れている
遠くから男たちの声がするがそっちはどうだとか絶対に探し出せと
か色々言っているし声の大きさからしてまだ見つからないかな
本当ならさっさと逃げたいけど

「ん~~~~！ん~~~~！」

隣で縄でグルグル巻きにされた男が陸に上がった魚みたいにしたば
たしていた

まずはこの男をどうにかしないといけないわね

第二話「紅髪と泥棒と死亡フラグと」

ようやく縄を解いてもらい口のガムテープを外す
やっと自由になった

とりあえずお礼を言おうと相手を見るとそこには美少女が居た

紅くて長い髪を縛ったポニーテール

髪と同じように綺麗な紅い瞳

身長はおおよそ160cmだろうか

引き締まった腰にかわいいお尻

あとは胸があれば良かったけど神はそこまで気がまわらなかったの
か残念な結果だ

全体からみるとおそらく15、16歳の美少女が居た

「ん？何？」

視線に気づいた彼女と目が合うが見惚れていたなんて恥ずかしい事は言えないので顔を背ける
すると近くにあったガラスに映った自分が目に入る

黒髪のショートで若干ツンツンしているのは寝癖によるもの
顔はごく一般的な顔のだが長時間のネットゲで少しやつれてるし
身長はそこまで低くないが中途半端だ
いわゆる中肉中背ってやつだ

片や紅髪のポニーテールな美少女
片やどこにでもいるニート予備軍な大学生

彼氏にしてもらうには釣り合わなさ過ぎる
なんて図々しいというかまだ状況の整理が出来ず混乱しているから
なのかそんな事を考えたりする
もっとも初対面の特にこんなところで会った人を彼氏にするわけないだろうが
せっかくフラグが立ったのだからもっとアプローチしたいと何故か
考えてしまった
フラグとか使っているけどなんというかオタクなんです…うん
でもとりあえずは

「あのここは？」

今は自分の事を考えないと
彼女とのフラグを育むまえに現状を把握しないと
さっきの黒服達の手で死亡フラグが立ってしまう
そんなことになったら彼女とのフラグも終了だ

ってどうしたんだろ俺
やっぱり状況が整理出来てないみたいだ

「なに？あなたここがどこか分からないの？」

「気がついたらここにいたんでさっぱり」

「気がついたらって…はあ、ここは海鳴市の端にある廃工場よ」

海鳴市？どつかで聞いたことがあると思うのだが
家の近所では無いのは確かだ

「それよりもどうするの？こんなとこに居たら殺されるわよ」

確かにここに居たら殺される
少しでも早くおさらばしたい
しかし逃げる前にいくつか気になる事もあし聞いておくか

「そつえばあなたは何でこんなとこに？」

「え！？」

ビクツと彼女の体が震える
助けてくれたのは嬉しいが何でこんなとこに居たか気になる
どう考えたって廃工場に美女は異質だろ
そんな訳で聞いてみたがなんか怪しい…

「えっと、その…そつだ私この工場の持ち主でさ、気になったから来たのよ」

焦ってるのか手をわたわたと振りながらあからさまな嘘で誤魔化そうとする

「嘘じゃないよ！本当だってば！」

まだ信じて無いのに気付いたのか慌てている

やべ、可愛い

そんな彼女をもう少し眺めようとするが

「見つけたぞお前ら！」

銃を構えた黒服達が登場

お前ら空気読め

「えっ！どうしてここに居るって分かったの！」

彼女が見つかったことに驚いているが

そりゃあんだけ騒げば分かるだろ

「おとなしく盗んだ物をよこせ」

盗んだ？誰が？

俺じゃないから後は…

「何言ってるの！あれはあなた達が騙して手に入れたものでしょ！」

やはりこの娘か

「渡さないなら力ずくだ」

銃の引き金に指をかける

これはやばいと思ひあの子に近づいて

「おいどうすんだよ、とつとと渡せよ」

「いやよ、そんなの」

小声で説得するが効果がない

「盗んだもの返さないと死亡フラグだろうが」

「どつちにしても死亡フラグよ」

多分そんな気もするが返したほうがまだ助かる…と思う

「おい、お前らこそこそ何を…」

見かねた黒服が止めようとするがその隙に彼女が動いた
さつきも使った球を懐から取り出し黒服達に投げつける

「同じ手が何度も通じると思うか！」

とつさに黒服達は腕で顔を隠したりしたが光る気配がない

あれ？と黒服達の注意が緩んだ隙に彼女は奴等に向かって走り出した
それに気付いた黒服の一人が銃を撃とうとするがそれより早く彼女は
懐に入り殴り吹っ飛ばす

驚いていた黒服達の一人の服を掴み背負い投げの要領で投げ飛ばし

他の黒服にぶつける

銃を撃つ奴もいたがそれを紙一重でかわし蹴りを放つ
殴る蹴るよける投げるまた殴るよける

彼女はそれの繰り返しで

どんどん倒していく

数分後には黒服達は全員地面に伏していた

「所詮こんなものね」

腕を組みながら立っていた彼女はかすり傷の一つもなかった

やべ強いと思っっていると倒された一人が伏せたまま銃を構え彼女を
狙う

しかし彼女はまだ気がついていないみたいだ

「危ない！」

俺は走り出し彼女を突き飛ばす

その直後響き渡る一発の銃声

それにあわせて体にはしる痛み

ああやっぱり死亡フラグかなんて思ってしまった

彼女が走って来るのが見えたのを最後に俺の意識は途絶えた

第二話「紅髪と泥棒と死亡フラグと」(後書き)

なのは「なのはと」

フェイト「フェ、フェイトの」

「リリなの通信」

なのは「ということが始まったの」

フェイト「えと、これって何？」

なのは「ちよつと待ってて確かここに説明の紙が、

あ、あったよ。えっとこれはこの小説の補完の為の企画だって」

フェイト「つまりはどういうこと？」

蒼零「つまりは私のダメダメな文章せいで分かりにくいところを説明するということだ」

なのは「いきなり登場はびっくりするの」

蒼零「まあそういうな、他にも様々な事をする予定だからよろしく」

フェイト「ねえなのは？」

なのは「何フェイトちゃん？」

フェイト「この人誰？」

蒼零「・・・」

なのは「こ、この人はこの小説の作者さんなの」

フェイト「ご、ごめんなさい。そうとは知らずに」

蒼零「・・・ぐすん」

なのは「そ、そうだフェイトちゃん！作者さんがいるなら質問しようよ！」

フェイト「そうだね。・・・そうだ一つ質問いいですか？」

蒼零「何？」

フェイト「この小説の主人公の名「そくだ用事があったっけな。それじゃ！」あ、帰っちゃった」

なのは「逃げたの」

フェイト「えっと、それじゃこの小説を」

「「よろしくお願いします!」!」」

蒼零「しょうがないじゃないか、書こうと思ってたら考えてたのは違う流れになっちゃったんだから・・・」

第三話「彼と彼女と私と」(前書き)

更新遅れてすみません

なんとなく文は思いつくけど前話とつなげ方が上手く出来ず悩みまくってました。

文才が全く無い上に更新も遅いとは全くダメダメですね。

第三話「彼と彼女と私と」

彼が撃たれてから数十分が経っただろうか
未だに彼の体からは血が止まらず流れている

「はあ、はあ」

彼を背負いながら私は走る

出血で背中が気持ち悪いがそんなこと構ってられない
あの時油断していた私を彼は身を挺して守ってくれた

「う、くっ…」

背中から苦悶の音がするがスピードを落とす事は出来ない
先ほどの黒服達は全員倒したが増援が来るかもしれない

「うぐっ…」

あともう少しで目的地だから頑張るって

第三話「彼と彼女と私と」

遅い

私があいつを見送ってからもう四時間は経っている
いつもなら二時間もあれば帰ってくる

もしかして捕まったか？

いや、あいつは唯の人間相手なら負けないはずだ

そんな事を考えていると扉が乱暴に開きあいつが入ってきた

「すみません、遅くなりました！」

謝るのは良いがもう少し静かにして欲しいものだ

「騒々しいな、今何時だと」「すみません、それより大変なんです！
なに？」

未だ息が荒々しいあいつの背中には見知らぬ男が居た
怪我をしているのか血が滴り落ちている

「その背中 of 奴は誰だ？」

「説明は後でします、だから彼を……」

説明は後か、仕方が無い

「分かった、とりあえずこっちへ運びたまえ」

「ふむ、弾丸が心臓付近で止まっているのか、それに出血もひどいな」

男を私の寝室に運びいれ容態を調べる

事情を聞いたが助ける為に自分の身を投げ出す奴がいたとはな

「それで大丈夫ですか？」

あいつが聞いてくるがやはり罪悪感からか声のトーンが低い
ちなみにあいつは血濡れのままではなく風呂上りだ

最初はこの男が気になって風呂に入ろうとはしなかったが私が強引
に入れさせた

さすがに血まみれのままでは私も気になる
それにせっかく綺麗にしたばかりの事務所をこれ以上汚されたく
ない

「大丈夫なものか、おそらくあと数分で大量出血で死ぬな」

簡潔につげる

こいつは私達とは関係ない

どうなるうと構わない

まあ後処理が面倒だが

「そんな、どうにかならないのですか！」

どうにかといっても私は医者じゃないんだが

それに医者だとしても無理だろうな『この世界』ではな

…そういえば確か面白いものがあつたな
それならなんとかなるか？

しかしあれはその道の奴らから買ったものでかなりの金額になるか
ら勿体無いしな

「そんな、私のせいで…、うっ、うっ」

あいつは自分を責めて泣いていた
前々からもう少し割り切れといつていたのだが
まだ無理か

「分かった、分かったから泣くな、鬱陶しい」

まったく余計な手間を

成功したらこの男を存分に働かしてやる

失敗？そんなの考えたくも無い

「本当ですか！」

「ああ、作業の邪魔だから自分の部屋に戻ってくれ」

今からすることはとても繊細な作業だ

近くに居られたら集中出来ない

「それじゃお願いします」

それだけ言うと自分の部屋へ戻っていった

「さて、始めるか」

私は部屋の奥隅にある金庫から緑色の小さな珠を取り出す
それを男の傷口の上に載せる

目を閉じ神経を集中させ呪文を唱える
すると珠は輝きだし彼に取り込まれる

しばらくすると弾丸が傷口から出てきてその後傷口がまるで無かったように塞がった

「よし、これで大丈夫…、何！」

これで終わるはずが急に彼自身が輝きだし光が部屋に満ちた

数分後ようやく光は収まった

一体何が起きたんだ？

理由は彼を見て理解した

なるほど、まさかこのような事になるとは

当の本人は自分の身に何が起きているのかも気付かず心地よく寝息をたてていた

これから楽しくなりそうだ

第三話「彼と彼女と私と」(後書き)

なのは「なのはと」

フェイト「フェイトの」

「「リリなの通信!」」

なのは「みなさんお待たせしましたなの」

フェイト「ようやく第三話です」

なのは「結局主人公の名前はどくなったの?」

フェイト「それは次話で分かるみたい」

なのは「第四話でやっと分かるのってどうなんだろう?」

フェイト「それは作者も思っているみたい」

なのは「他にも名前が分からない人がいるよね」

フェイト「前話と今回の話で二人」

なのは「そうそう、今回出た人って女性なのかな?」

フェイト「一応『私』って言ってるからそうだと思う」

なのは「なんとというかこの作者さん駄目な人だね」

フェイト「そんなこと言っちゃ駄目だよ」

蒼濤「orz」

フェイト「いつのまに」

なのは「にやはは、それじゃ今回はここまで」

フェイト「次回もお楽しみに?」

なのは「聞いちゃ駄目だよフェイトちゃん」

蒼濤「こんな私にアドバイス、感想がありましたらドンドンお願いします。あ、でも文句しか無いのは送ってこないで下さいね、そうじゃないととても落ち込むので」

第四話「自己紹介と小学生と新たな生活と」(前書き)

月1更新しかできない

第四話「自己紹介と小学生と新たな生活と」

「う、うん」

「ここはどこだ？」

えーと確か俺は撃たれたはずなんだけど
きよるきよるとあたりを見渡すが誰もいない
というかここはどこだ？

「…っ！」

なんか頭に痛みが

それにさっきからずっと霧がかかったように意識がはっきりしないし

「一体何があつたん…!？」

ぼんやりと近くにあった窓に目をやり

そして俺は驚いた

当たり前だなんせその窓に映っていたのはいつもの自分ではなく
幼そうな顔とまだまだ成長するだろう小さな体の人物だった
というより小学生頃の自分が映っていた

「なんじゃこりゃ〜!！」

第四話「自己紹介と小学生と新生活と」

「ふむ、君の体に異常は無いようだな」

俺の叫び声に気付いて二人の女性がやってきてすぐに身体検査をしていたのだが

「どこがだよ！どう考えても異常だろ！小学生になってるだろ！」

「なに、「冗談だ」

くっくつと薄い水色の髪の女性が笑う

いやいやいやこっちは冗談で済まされると困るから

「それでなんであなたはあそこに居たの？」

そんなやり取りを離れてみていたあの時の紅髪の少女が聞いてくる

「だからさ、気がついてらあそこに居たって言ったよな」

「そんなので、ああそうですかって納得出来るわけないじゃない！」

そんなこと言われても事実だしなあ

「まあ待て、そんなに怒らなくてもいいだろ」

やれやれと薄水色髪の女性が落ち着かせる

「それに」

女性がこちらを見る

さっきは気付かなかったけどこの人もかなり美人だ

さっきも述べた通り薄水色の髪でそれが肩にかからない程度に揃え

られており

スタイルもとても良く

胸は…まあ紅髪の美少女よりは少し大きいけど

とりあえずこちららも美人だって事だ

多分25歳前後力かな？

さすがに年齢は聞けないか

「…だしな、おい聞いてたか？」

貴方の事を見ていて聞いてませんでしたなんて恥ずかしい事言えな
いし

どうしよかなんて考えていたら

どうやら顔に出ていたのかはあと軽いため息を吐かれた

「つまりはだ、君に色々と説明をしないといけないなと話していた
んだ」

「ああなるほど」

「それにしてもあなた冷静ね、そんな姿になったのに」

確かに自分でも不思議なくらい冷静だと思う

でもあの時死んだと思ってたし今更何が起きてもなあ

小学生になっただけ

それよりもだ

言いたいことが色々あるがまず最初はだ

「あなたとか君とか言うのやめて欲しいな」

「それは仕方ないだろ？名前を聞いてないのだからな」

いつの間にか煙草を吸い始めてた薄水色の髪的女性が言う
そういえば言っていないな

「ごめん、俺は柊諒助、一応大学二年なんだけどな」

「ふむ、よろしく。私は国崎瑞穂だ」

「私はフィアナよ」

煙草を吸っている女性が瑞穂さんで紅髪の美少女がフィアナか

「ああ、よろしく。それで何でこんなことになったんだ？」

「そうよ、私も何がなんだか分からないわ」

「そうだな、だがその前に君に知ってもらいたいことがある」

「だから君じゃなくて諒助だって。いや、もういいや。

それで知ってもらいたいことって？」

「君は魔法を信じるか？」

「は？魔法？」

「えっと、それって空飛んだり、火を出したりすることが出来るあれのこと？」

他にも”O・H・A・N・A・S・I”の為とか

いや、これは特別か

「ああ、大体そんな感じだ」

さも当たり前のように話す瑞穂さん

「信じられないかもしれないがね」

「分かった、信じるよ」

「やけにあっさり信じるのね」

いやだって、この体を見てみるよ

どう見たって大学生の体じゃないだろ

「理解が良くて助かる、それでだ何故君の体がそんなことになっているのかと言うとだ、魔法によるものだ」

やっぱりか、なんとなく魔法の話が出てきたからそんな気がしてたんだよな

「君は覚えているか？撃たれたことを？」

「ああ、覚えてる」

かなりはつきりな

走馬灯は見えなかったけど

「あれで君は出血多量で死にかけた、そして」

「瑞穂さんが魔法で助けてくれたのか？」

「いや、そうではなくてな、そうだなこれを見たまえ」

どこに持っていたのか知らないけど一枚の写真を取り出した
緑色のビー玉みたいのが写っている

「これは？」

「ああ、これはだな、魔法のアイテムとでもいうのかな。これで君の体を治したんだ」

こんな小さいものでか？

「小さいからって甘く見ないほうがいいぞ。これ一つでここら一帯は消し飛ぶほどの魔力が秘められているからな」

これ一つでそんなことができるのかよ！

「本当ならこれを使って治療だけをするだけで終わるはずだった。しかし体が子供化してしまった。

おそらくだが血液が大量に流れてしまった為生命の維持が出来なくなった、そこで残った血液で維持できるように体を縮ませたと私は考えている」

魔法が無かったら死んでたな

「まあハプニングはあったが君は助かったというわけだ」

「大体は分かった」

「そうか、それでは君に聞きたいことがある」

聞きたいこと？

「これから君はどうするんだ？」

「どうするって、そりゃ家に帰りたいさ」

そんなの当然だろ

「しかしだ君はその姿で柊諒助を名乗る気か？小学生の体で？言つとくが魔法はこの世界では秘密になっている、つまりだ君がどれだけ柊諒助と言ひ張っても唯の頭のおかしい小学生に思われてしまうぞ」

「もしかしたら知り合いに実は魔法を知ってる奴が「ちなみにいうとだな魔法を知っている者はほんの一握りだ、それでもいるとでも？」うぐっ」

俺これからどうしよ

「そこでだ、君に提案、いや命令が正しいかな、がある」

「なんだよ」

「ここで働いてみないか？」

え？ここで働く？

「実はさっきの緑の珠だが、あれはかなりの金額になる代物でな
なるほど金を要求してるのか

「幾らだ？」

あんな珠ならせいぜい10万ぐらいだろ
それぐらいならバイトで稼いだ金でなんとかなるだろ

「これぐらいだ」

そついつて瑞穂さんは指を5本立てる
なんだ5万か

「その金額なら払え」勘違いしてるようだが「学生の君に払える
とは思えない」え？」

何言ってるんだ、5万だろ？

「5万ではないぞ」

もしかして50万か！

しかしそれでもなんとか払えるだろう

「50000万だ」

なんだ50000万か
50000、万？

「嘘だろそれ！どう考えたってそんな金額じゃないだろ！」

「嘘ではないさ、証拠はないがね」

そんな大金あるわけないだろ

どうすれば良いんだ！

どっかのブローカーに臓器でも売ったとしても無理だろ

「だからこそさっきの話だ、お金を請求しない代わりに君にはここで働いてもらう、なに給料もそれなりに出そう、住む場所はここで良いさ空いている部屋が何個がある」

お金を請求しないし給料も貰えるのか
住む場所もあるしな

「そうだな、更に言えば元に戻る手段も用意しよう」

「…分かった、その話のつた」

この体じゃ行くあてもないしな

「そうか、ならば宜しく頼むぞ」

「よろしくね」

「こちらこそ」

こうして俺は新たな生活を始めることになった

まさかこれからあんな事になるなんて誰も予想出来なかったと思う

というか俺は元の体に戻るのか？

第四話「自己紹介と小学生と新たな生活と」(後書き)

なのは「なのはと」

フェイト「フェイトの」

「「リリなの通信!」」

フェイト「やっとでたね、主人公の名前」

なのは「そうだね、あと他の人の名前も」

フェイト「瑞穂さんとフィアナさんだよね」

蒼零「ああここに居たのか」

なのは「どうしたの?」

蒼零「じつは次の話で二人のどちらかが出る事になったから呼びに来たんだ」

フェイト「え? そうなの?」

なのは「やっと登場なの」

蒼零「ごめん」

フェイト「大丈夫だよ、気にしてないから」

なのは「フェイトちゃん甘やかしたらだめなの」

蒼零「うぐ、やはり未来のマオ」あとでお話しようか」「ごめんなさい」

フェイト「な、なのは落ち着いて」

蒼零「そうだ! 用事があったからこれで」

なのは「逃げられたの」

フェイト「なんか前回もこんな展開だった気が」

なのは「気にしたら駄目なの」

なのは「それじゃこれからも」

「フヘイト」よろしくお願ひします

第五話「猫と依頼と狼娘と」(前書き)

めざせ週1更新

多分かなり先な気が

第五話「猫と依頼と狼娘と」

瑞穂さんとフィアナと出会って次の日
それは瑞穂さんから脅迫まがいの提案をのんだということになるわけ

「ふあゝあ、眠い」

まさか朝早くから仕事をするとは
今何時だと思ってるんだ5時だぞ
ありえないだろ
えーと確か瑞穂さんがメモ書きがあつたな

- 1・朝ごはんを作る
- 2・洗濯物を干す
- 3・事務所・部屋の掃除をする、ただし瑞穂さんの部屋は除く

つて、これじゃ家政夫だろうがゝ！！

第五話「猫と依頼と狼娘と」

「「ごちそうさま」

「「ごちそうさま、美味かったぞ」

「おそまつさまでした」

で結局作ってしまった

まだ小学生の体は慣れないから目玉焼きとみそ汁と簡単な物だったけど

「さて、今日は仕事が入っていてね、さっそくだが君にも手伝って欲しいんだ」

湯呑に入ったお茶を音を立てずに呑みながら瑞穂さんがいう

「仕事なんて私は聞いてないわよ」

「そりゃそうだろ、言っていないんだからな」

瑞穂さんは何を言っているんだとフィアナを見てる
こっちからすれば瑞穂さんが何言ってるんだと思うのだが

「まったく、いつも急なんだから」

「なにせ予想外の出来事があったからな」

俺の事ですね分かります

「それで？仕事は何なの？」

「ああ、いたって簡単なものだ」

朝食を食べてから4時間ほどが経っただろうか
瑞穂さんに言われた仕事の為に大通りを歩いているのだが
まさか猫探しなんてな

どうやら瑞穂さん達は何でも屋をやっているらしい
それは子供の相手をしたり引越しの手伝いなど
さらには浮気調査などもしているらしい
当然猫探しも仕事の内だ

「ほら、何突っ立ってるの。早く依頼人に猫を渡さない」と

先を歩いているフィアナに怒られるがそんなこと言われても困る
なにセフギヤーと俺の腕の中で猫が暴れているからだ
猫を入れるゲージが無かったので抱えているが

この猫相当達が悪い
腕は所々引つかかれ血が滲むし
服も少し破けてしまっている

「ああもう、何でそんなに嫌われてるの」

そんな事俺が知るわけないだろ

「ほら、こっちに渡しなさい」

猫を俺から奪い抱きかかえるフィアナ

引っかくと思ったが猫はゴロゴロとのを鳴らしてフィアナに懐いていた

こいつふざげやがって

「それで依頼主はどこに住んでんだ？」

「ちよつと待つて、え〜と、ここよ」

「は？ここって」

目の前にあるのは大きな門

そして左右どちらを見てもかなり先まである壁
それはまさに

「大豪邸だろここ」

「そつよ、ここら辺では有名ね」

いやいや、おかしいって

なんで日本にこんな大豪邸があるんだよ

「今から私はこの子を届けに行くけどどうする？」

どうするって言われてもな

「俺は行かない、さすがにこんな傷だらけの姿を依頼人に見せたら駄目だろ」

ここまでついてきてなんだけどまさかこれほどボロボロになるなんて思わなかったから替えの服なんてないし

そうそう服は体が縮んだ時に一緒に縮んだから問題ない
替えの服はさつき買って事務所に送ってもらった

「そう。それならこの街を知るためにもそのあたりをうろついてみれば？」

「そうするよ」

「それじゃ一時間ぐらい経ったらここに帰ってきなさいよ。」

「ああ、一時間後に」

フィアナと別れて十分ほどするがどうするか

こうやってぶらぶらするのは初めてだし

この街自体がまだ見知らぬ街だ

いや、全く見知らぬ街というわけではないのだが

色々あったから思い出すのに時間が掛ったけどこの海鳴市はあるア
ニメの人物の生まれ故郷の筈だ

多分瑞穂さんがした魔法の話も合わせて考えれば十中八九そうだろう

いやあまさか俺がアニメの世界に来るなんてな
二次創作だけだと思ってたのに
というか俺はちゃんと元の世界に帰れるのか？

「やめないか！」

「いいだろ、暇なら俺達と遊ぼうよ」

色々考えながら歩いていると路地裏でなんか喧嘩見たいのが起きてるな

「私にあんたらと遊ぶ気は無いんだよ」

「またまた、本当は行きたいんだろ？」

大学生かな？男が三人で女性を一人口説いてるけど相手はその気はないようだ

アニメとかならあそこに割り込んで女性を助けるんだろうが
あいにく俺はそんな勇氣はない
こんな小学生の体であそこに行ったら一発でダウンだ
だから俺はその場を去ろうとした

あのオレンジ色の長髪をした彼女を見るまでは

「しつこいねえ、あたしは嫌だって言ってるだろ！」

「いいじゃんか、一緒に行こうぜ」

「いまだ彼女をナンパしている男達に近づく
まずすることは

「あ、お姉ちゃん！こんな所にいた。探したよ」

「出来るだけ親しくまるで彼女の弟のように話しかける

「あ？なんだお前は」

「男達が睨んでくるが構わず彼女の手をとる

「ほら、早くしないと母さんが待ってるよ」

「え？」

「出来るだけ早くこの場を去りたいので急かす
この嘘がばれないうちに

「あなた、誰だい？」

「瞬間空気が凍った気がした

「馬鹿！せっかく絡まれた所を助けようとしたのに」

「ああ、そうだったのかい」

全くなんてことをしてくれただ

「おい、ガキ」

ナンパの妨害をされて男達は怒り心頭になっている

「そんな小さな体でヒーローごっこか？ああっ？」

やべどうしょ

「子供は大人しく家で遊んでな！」

男達の一人が殴って来る

しかしその拳は当たることが無かった

何故なら俺がひらりと横にかわしたからだ

「な?!」

避けられることを考えていなかったのか男はそのまま前のめりになって倒れる

他の男達も驚愕してるが一番驚愕してるのは俺自身だ

小学生の体で避けるのは絶対無理だと思ったのにさっきははっきり拳が見えていた

どこを狙ってるのかも瞬時に理解したから避けることが出来た

俺ってこんなに身体能力高かったか？

「この糞ガキが！」

他の二人も襲いかかって来るが未だに身体能力は上がったままなので冷静に対処できた

一人は足を引っかけて転ばせ

もう一人は突き出した拳を紙一重で避けて伸びきった腕をつかみそのまま背負い投げをした

男は投げられるとは思っていなかったのか受け身も取れず先に倒れていた男の上のしかかる形となった

「一体これは…」

何が起きたのか分からないのか女性はぽかんとしている

「ほら、今の内に」

男達が起き上がる前に彼女の手を取り走り出す

しばらくすると男達の怒声が聞こえるが構わず走り続けた

「はぁー、はぁー、ここまでくれば大丈夫かな」

「そつだね」

あれから人ごみのある大通りを抜けて今は小さな公園に居る

「それにしてもすごいじゃないか、大の男達をあんなふうにするなんて」

こつちもまさかあんなことが出来るなんて思わなかったよ
あとで瑞穂さんにきつちり聞かないと

「それじゃ、俺はそろそろいくよ」

「ありがとう、助けてくれて」

「いいさ、別に。じゃあねアルフさん」

「じゃあね」

男の子と別れてから数分後

念話が入って来る
多分フェイトかな？

『アルフ聞こえる？』

『聞こえてるよフェイト』

『いつもの場所に居ないから心配したんだよ』

そうだった、フェイトに連絡して無かった

『ごめんね、フェイト』

『いいよ。それでねさつきジュエルシードの反応があったんだ』

『分かった、そっちにいくよ』

念話を切りフェイトが居る場所へ向かう

それにしてもあの子は何者だったんだろう？少し魔力を感じたけど
魔導師には見えなかったし

あれ？そういえばあの子に私の名前教えたっけ？

第五話「猫と依頼と狼娘と」(後書き)

なのは「なのはと」

蒼零「蒼零の」

「「リリなの通信!」!」

なのは「蒼零さん」

蒼零「なんだい?」

なのは「どうしてフェイトちゃんがあれだけしか出てないの?」

蒼零「え、いやあの」

なのは「フェイトちゃんアルフさんが出たから自分もしっかり出れると思つてたの」

蒼零「あのなのはさん?」

なのは「最後の念話しか出てないのってどうなの!」

蒼零「本当はフェイトが絡まれてたのを助ける予定だったけど上手く出来なくて」

なのは「そのせいでフェイトちゃん落ち込んでたの」

蒼零「えーと、そうだ用事が「全力前回ディバインバスター」ぎゃああ〜」

なのは「ということで次回もよろしくお願いします」

蒼零「あ、あれがなのはの砲撃、おそるべし未来の魔お…がくっ」

第六話「お嬢様と人助けとツンデレと」

「いたゞ、殴らなくてもいいじゃん」

すりすり頭のとんこぶをなでる

「約束の時間に居なかったからでしょ」

隣でたんこぶを作った元凶であるフィアナがふんと鼻を鳴らしていた

「遅刻したのは悪いと思ってるよ、だからってここまでしなくても」

「一時間も遅れてくるのが悪いの」

そりゃ俺が悪いよ

でもそれは遊んでたんじゃなくて

人助け、いや犬助け？をしてたからで

「それで、こんなに遅れて何やってたの？」

「いや、その、あははは」

アニメのキャラを助けてたなんて言えないし笑ってごまかすしかない
それにまだ確証は無い

もしかしたらそっくりさんの可能性もあるし

いや、俺の考えが正しければ多分

魔法少女リリカルなのはの世界に来ちゃった

魔法少女リリカルなのはとは簡単に説明すると《熱血バトル魔法ア
クシヨニアニメ》と呼ばれるもの

まあ気になるなら検索してくれればいい

いやあでもまさかね

小説みたいな展開があるわけないよね

でもなあ、俺が助かったのは魔法のおかげって言ってたし

嘘だとすると俺は生きてないからなあ

どうしょ？

「ちよつと聞いているの？」

「え？何？聞いてたよ」

やべ、フィアナと喋ってるの忘れてた

「まあいいわ。それより早く事務所に帰らないと、瑞穂が待ってる
わよ」

そうだった、あの人は料理が面倒だからまた出前をするかも

特上寿司とかトリユフが入ったパスタとか

とりあえず目についたもの、特に高いものを出前するからやばい

しかもそれが俺の給料から出るからなおやばい

昨日の晩は酷かった

出前を取ったから俺の歓迎会かなあ、なんて思っていたら

あるうことかあの人こっちに来たときに偶然持ってた俺の財布から

支払いやがった

しかもだ、これからは俺が三食用意しないと俺の給料で出前を取る

って言われたときは絶句した
とりあえず早く帰らないとやばい主に俺の懐が

「そうだな、早く帰ろう」

急いで事務所に帰るためにバス停に向かうはずだったのだが

「ちょっと！何するのよ！」

「うるさい！いいからお前らとつと乗れ！」

大通りから少し外れた一角で何やら喧嘩が起きているのを発見

小学生二人とスーツの男が三人

どうみても知り合いじゃなさそうだけど

「離しなさいよ！」

男に腕を掴まれほどこうとする少女

「お願いです、離して下さい！」

同じく腕を掴まれてるもう一人の少女

あれ？この声聞いたことがあったような

「離せって言ってるでしょ！」

「このやろっ、優しくしてればつけあがりやがって」

男達が強引に二人を車に乗せるとそのまま走り出した

急に起きたことなので頭の中を整理すること数秒

「あれって誘拐だろ!!」

「そうね、しかも誘拐された女の子は二人とも知ってるわ。確か有名な財閥のお嬢様で片方の子はさっきの依頼主の子よ」

さっきのってあの大豪邸のか
なるほど金持ちののお嬢様か
それなら金目当てで誘拐だろうな
ってそんなことより

「どうする？警察呼んで助けてもらうか？」

とりあえず俺らは一般人だから人助けなんて無理だろ

「なに言ってるの！ここで恩を売っておけばもっと仕事ができるようになるじゃない！」

無理なはずなんだけどなあ

「ほら行くわよ！」

車の後を走って追いかけるフィアナ

それを見ながら深いため息を吐いてそのあとを付いて行くしかなか
った

車を追いかけること約十分
車は近くの港の倉庫前に停まっていた
大通りでは少し目立つ黒い車は人通りが全くない裏道を走っていた
からなのかスピードもなくフィアナがなんとか追跡することが出来
たが
俺はというと

「はあはあ、げほつ、もう、無理」

なんとか追いかけることが出来ただけで絶賛息切れ中であり近くに
あった木箱に腰を掛けていた

「もう、だらしないわね」

俺の姿を見てフィアナが文句を言ってくる
とうのフィアナは汗一つないのはなんでだ？

「ざっと見たけど倉庫前に二人、中には多くて十人ぐらいだと思っ
そしていつの間に誘拐犯の配置と人数を確認したんだ？

「それでどうすんだ？まさか正面から堂々と行くのか？」

「そうね、それもいいかもね」

まじか、こっちは冗談で言ったただけだぞ

「それじゃ行きましょ」

どうがんばっても死亡フラグな気がするんだが？

side???

これで何度目の誘拐だろうか

パパが大企業の社長だから私を誘拐すれば大金が手に入るのはわかるわよ

でもそんなことをしてパパがこいつらを許すわけない

以前私達を誘拐した犯人は何をされたのか知らないけど全身ボロボロになって警察に連行されていったわね

でも今回はいつもと違うだって

「大丈夫？ すぐか？」

「うん、なんとかね」

私の親友のすぐかがいる

私だけだったらなんとかなるけどすぐかがいるからやばいかも

「へへっ、お嬢ちゃん達すごいね誘拐されたのにこれっぽっちも泣かないなんて」

近くに居た男が下品な笑いをしながら話しかけてくるが無視をする
こういう輩には構っちゃダメってパパが言ってたし

「おい、お前ら少し黙っている」

違うほうから銃を持った男がやって来た

「へい、すみません。ですが…」

バンと弁解をさえぎるかのよつに地面に撃たれる一発の弾

「俺は黙っているといたはずだ。出来ないなら俺が黙らせてやる
うか？」

「す、すみませんでした！」

「分かったなら早く見回りに行つて来い」

どうやらこいつがリーダーみたいだけどなんだか今までの犯人よりも危険な感じがする

「いいか小娘共、変な動きをしたらどちらかを殺すからな」

殺すですって？ふざけないでよ！なんで私達が殺されなきゃいけないのよ！

私の心情を察したのか男が私の近くに銃弾を一発撃ち込む隣ですずかが短い悲鳴をあげた

「全く、何で俺がこんな小娘共を誘拐しなければならなんだ。ク
ライアントの考えは分からないな」

犯人はこいつらだけじゃなかったの？

他に誰がいるのか問い詰めようとしたがそれは出来なかった
何故なら

「うぎゃー」

変な声をあげて先ほどの男が吹っ飛ばされてきたから

side 諒助

全く正面突破って聞いたときは驚いたぞ
俺死ぬ覚悟したぞ

まああいつだけ正面突破で俺は裏から潜入って聞いたときは少し安心したけど

いや、助けてくれる人がいないからこっちの方がやばいのか？

「ほらほらー、掛かってきなさい！」

遠くではフィアナが戦っているのが見える

犯人達も頑張っているが次々に倒されていく

残るは人質二人に銃を所持した男といかにも雑魚っぽい奴が一人
まだこちらに気付いてないみたいだな

それにしてもやっぱりあの女の子達どっかで見たような？

まあいいや、それよりも行くか

今自分は奴らの頭上にある金網に乗っている

幸いなことに誰もここに居るとは気付いていないみたいだ

だからここから飛び降りて踏みつければ一人は倒せる

あとは動揺している内にもう片方にタックルなりなんなり決めれば

後はフィアナが何とかするだろう…して欲しいな
ふうと一つ深呼吸をした後覚悟を決めて飛び降りる

少し浮遊感を感じてすぐに足に何かを踏んづけた感触がくる
グエツと声があるが無視して残りもう一人の犯人に飛び掛る

sideアリサ

少し離れたところで女の人が一人で戦っている

それはまるでカンフー映画のようにすぐて犯人達を倒していく
そんな光景に近くにいた銃を持ったあの男も驚いていた

「いててー、一体何なんn…」

さっき吹っ飛ばされた男が起き上がり私達と同じようにあの光景を
見ようとしたが

突然上から降ってきた男の子によって倒されてしまった

急な登場の仕方に私達は驚いていたがその男の子はその隙について
銃を持った男に襲い掛かったが

「甘い！」

すぐに男は冷静になりあっけなく避けられてしまう

それでも彼は諦めずに殴りかかるが大人と子供では力が違いすぎる
片手であしらわれ更に左肩を撃たれた

「くそ！何でだ！」

彼は左肩を抑えながらそう呟く

「何でだと？当たり前だ。子供が大人に勝てるものか」

男は彼を蹴り飛ばす

「うがつ！」

痛みで受身もとれず地面に転がる

「こうなったらこいつらを殺して逃げるか。幸いまだあそこの女は部下の相手をしている。顔を知っているのはお前らだけだ」

銃口が私に向けられる

後数秒もすれば私の人生も終わる

そしてその後すずかもそこに倒れている彼も撃たれておしまい

いや、そんなのは嫌だ

まだしたいこともたくさんあるしパパやママそれになのはにも会えなくなる

そんなの嫌だ

「じゃあな」

恐怖で目を瞑ってしまう

そして一発の銃声が鳴り響いた

side 諒助

くそ、まさか避けられて撃たれちゃうなんて
小説とかだとピンチになれば強くなると思ったんだけど
やっぱり無理なのか

諦めちゃ駄目だ、俺だけならまだしも女の子が撃たれそうなのを黙
つてみてられるか！
助けたい、何としても彼女達だけは！

ボロボロの体に鞭打って起き上がらせる
なんだかさつきよりは痛みが少ない
これならいける！

そう思ったときには体が勝手に動いていた
男が銃の引き金を引く
とっさに俺は右腕を振り切っていた

辺りに響く銃声
放たれた弾丸は女の子の遥か後ろの壁にめり込んでいた

「くそ！この餓鬼が」

殴られた男が頬についた血を拭い俺を睨みつける

「死にやがれ！」

銃に残った全ての弾丸を俺を殺す為だけに放たれる
さつきは簡単に撃たれたけど今は違う

不良と喧嘩した時みたいに、違うその時以上に体が軽く感じ、感覚
が研ぎ澄まされる

弾丸は4発

全て俺に向かってくるがそれを紙一重で避ける

そして全て撃ちつくしたのを確認したら猛スピードで奴に向かって
走り出す

相手も弾を撃ちつくしたのを確認すると銃を棄て懐からアーミーナ
イフを取り出す

「くらえ！」

男がナイフを振り下ろすがそれをかわして腹に拳を一発入れる

「まだだ！」

今度は横薙ぎをするがしゃがんで避ける

出来た隙について顎に向かって下から上に掌底を当てる

「く、そ、が…」

男は最後の言葉を吐き倒れた

sideすずか

誘拐犯が倒されて数分後

警察がやってきた

なんでも匿名の通報があったみたい

犯人達が連行されてく中私はアリサちゃんと助けに来てくれた二人にお礼を言おうとしたけどいつの間にか姿を消していました

その後警察が調べたけどどこにも痕跡がなくて

あの子が撃たれた時に流れた血は何故か無くなっていて結局あの子が何者なのかすら分かりませんでした

でもいつかまたあの子と会える気がしました

その時はお礼を言いたいな

第七話「俺と力と落とし穴と」(前書き)

久しぶりの投稿

どれぐらいぶりだろっし…

第七話「俺と力と落とし穴と」

ありさとすずかの誘拐事件の翌日

俺は”何事”もなく瑞穂さん達の為に朝ごはん作りに勤しんでいた
そう”何事”もなくだ

本来なら重傷なはずの俺が動いているのはおかしいのだが瑞穂さん
は昨日の事件がなかったかのようにコーヒーを飲んでいた

少しはおどろけよ・・・

七話「俺と力と落とし穴と」

アリサ達の前では平然としていたがそれはテンションが高かったの
と男の見栄であり

実際アリサ達から離れた後は痛みで顔を歪ませ、変な汗が出まくっ
てやばっかた

なんとか事務所に戻ってきてきて瑞穂さんが中で心配してるんだろうな
と思いつつドアを開けると

「ん？遅かったな」

そりゃもうゆったりとティータイムしてましたよこの人

「ほら、動かないの」

「そんなこと言ってたって、痛いものは痛いんだから」

あの後上の服だけ脱いで今はフィアナが傷口を手当てしている
幸いなことに弾丸は腕の中には残ってなかった

そんな中でも瑞穂さんが一切手伝わないのは瑞穂さんだからなんだ
なあとなんとなくこの数日で分かった

分かりたくなかったけど

「それにしても……」

未だ手当ての最中の腕を見る

手当てのおかげで血はそこまで出てないが腕に巻いた包帯を赤く滲
ませていた

腕だったからまだ良かった

頭だったら即死だろうし

胸に撃たれたらどうだろ？一回助かったから何とかかなりそうな気が
するけど

まあ、実際はそんなことしないけど

「実は君に見せたい物があったね」

いつの間にか紅茶を飲み終わった瑞穂さんが近くにあった柵からフ
ァイルを取りだしこっちに放り投げる

それを慌てて怪我をしてないほうの腕でキャッチする

パラパラとファイルを捲り中身を見るが

ファイルの中身は何やらグラフやらどこかの地図やらですぐには理
解できん

「これは？」

「なに、君達が出て行った後で色々面白い事が起きてね、それを纏めたものだ」

「どうしてそんなものを俺に？」

「とりあえず目だけでもおしておいてくれ。説明は明日しよう。本当は今からでもいいのだが…」

ちらりと瑞穂さんが俺の横に居るだろう人物を見る
それにつられて俺も横を見ると

「zzzz、はっ！私は寝てないわよ！」

少し虚ろな目で俺の腕に包帯を巻いていたフィアナが居た

いや、さすがにそれは説得力ないぞ
軽く寝息立ててたし

「な、なによ！私は寝てなかったわよ！」

顔を真っ赤にしながら反論するフィアナ
やべ、かわいい

「さて、こんなところで雑談するよりも早く寝ようじゃないか」

空気を読んだ瑞穂さんが席を立ち自分の寝室へ向かっていった

「そうですね、早く寝ましようか」

俺もそれにならって寝室へ向かった

「だから私は寝てないってばー!!」

後ろで何やら叫んでいたが無視だ無視

かまっていたら睡眠時間が減る

飯とか風呂とかどうしよ

まあいいや早く寝よ

布団に入った数分後には俺は夢の世界へ旅立った

そして朝をむかえたわけだ

「どうしたんだ？まるで変な物を見るような目をして」

きつね色に焼いたトーストを齧りながら瑞穂さんが尋ねる

「実際そうでしょ、肩を撃たれたはずの人間が何事もなく家事をしてるのって不思議じゃないのか？」

「しかしだな以前に大人が子供になったのを見ればこの反応は当然だと思うのだが？」

「確かにそうだけど「おはよー、ってあんた大丈夫なの！」な？普通はこうだろ」

遅く起きてきたフィアナが来たが俺が家事をしていて驚いたようだ

「そんなものは人それぞれだ」

「そんなものか？まあいいやフィアナ、俺は大丈夫だから早くご飯

を食べる冷めちまう」

「そうね、いただくわ」

さつさと手を洗い食卓に着きフィアナは瑞樹さんと同じくおいしそ
うに焼けたトーストを食べ始めた
さてと俺も食べるかな

黙々と食べること数十分

全員が食べ終わり瑞穂さんとフィアナは食後のティータイム

俺は食器を洗っていた

ここに来てからここまで日にちは経ってないが何故かこれが当たり
前のようになっている

それは瑞穂さんが出前ばかりで自炊しないから

それはフィアナが家事が下手だから

それは俺が下宿生活をしていて家事全般が出来るから

はあ、まるで狙ったかのような状況だな

そもそもちゃんと生活は出来ていたのだろうか？

俺が来たときはそこまでひどくなかったから多分お手伝いさんでも
雇っていると思う

「ああそうだ、あの時の話の続きなんだが」

俺が食器を洗い終わってそちらへ向かおうとしているとき瑞穂さん

が思い出したように話し出す

「あの時？ああ、フィアナがね、寝て無かったわよ！」のときのか」

フィアナが寝てたかなんて今はどうでも良い

それよりも今は瑞穂さんの話が大事だ

寝る前にあのファイルを少し読んだが気になることが色々書かれていたし

「実は最近魔道師がこの街に来たみたいだな」

魔道師か

多分アルフやフェイトだな

アルフが居たのなら主人であるフェイトも居るはずだし

「私達がここに居るのは管理局は知らないはずだが最近になって頻繁に魔力を感じてな。その特定をするために測定用の計器を動かしていたんだが」

「そしたらあんな計測が出たと？」

グラフがあつたけどあれはどう見ても普通では無かった

なんか一瞬だがすごい値を出したのがあつたな

「そうだ、魔法を使うにしている時間が短いっえあれほどの魔力を出せる者はそういない」

「そんなにいないものなのか？」

「ほんの一握りの人間に限られてくるだろうな」

なんでそんな奴がこんな魔法文化の無いところに？

「それでその数値を出した奴はどこに？」

「ん？気付いてないのか？」

気付いてない？

「何が？」

「その人物は君のことだ」

……………は？

まてまてまて！

俺が出しただと

「まあ今分かっているのは計測された時間と場所だからはっきりとは言えんがな。おそらく間違いないだろう」

「フィアナじゃないのかよ！」

「それも考えたが魔力の波長が違っていた」

「そんな事あるw」「あつ！そういえば」「ん？どうした？」

さっきまで話に参加しなかったフィアナが何か思い出したようだ

「あのさ、諒助が拳銃を持った人を殴った時に一瞬、ほんの一瞬だけ強力な魔力感じたのよ。あの時は気のせいだと思っただけだね」

「まじで俺が魔法を？」

「そんなの信じられ…いや、よくよく考えれば思い当たる節がいくつかある」

「アルフを助けるとき」

「んで、今回の事件」

「もしかしたら今日起きた時には治っていた体もかな」

「どうやら理解してくれたようだな」

「俺の様子を見て分かったみたいだ」

「それでだな」

「あれ？まだあつたんだ」

「どうやら君はまだ上手く使えないみたいだからな、使いこなすためにあることを考えた」

「どうするんだ？」

「なに簡単な事だよ」

「そう言った瑞穂さんは」

「ニヤリと笑みをうかべていた」

「その横にはどこにあったのか紐が天井から垂れていた」

「その時俺は何か嫌な予感がしたのでダッシュで逃げたが」

ガコンと足元から音がしたので見てみるとポツカリと穴が開いていた
飛行魔法なんて使えないので俺はそのまま…

「なんじゃこりゃ〜〜!!」

落ちて行った

第七話「俺と力と落とし穴と」（後書き）

なのは「なのはと」

フェイト「フェイトの」

「リリカル通信」

なのは「みなさんお久しぶりです」

フェイト「私たちは元気です」

蒼零「まあぶつちゃけ二人はまだ出てないけどな」

なのは「むっ、それは蒼零さんが怠けてるからなの」

蒼零「そうだけどさ」

フェイト「そうだよ、アルフは出て私は念話だけなんて」

なのは「フェイトちゃんはまだ良いよ、私主人公のはずなのにまだなんだよ」

蒼零「それなら問題ない、次はなのはをメインに書こうかなと」

なのは「本当!？」

蒼零「本当だって（多分…）」

フェイト「なんか心の声が…」

蒼零「気のせいだって、ほら二人ともそろそろ締めないと」

フェイト「そうだね、それじゃ」

なのは「次もリリカルマジカルがんばります」

フェイト「大丈夫かな？」

なのは「大丈夫だよ、もしもの時はスターライト・プレイヤーしっかりお話するから」

フェイト「な、なのは…」

第八話「辿り着いた先は…」

「なんじゃこりゃ〜！〜！」

目の前で諒助が叫びながら落とし穴に落ちていく
それをしばらく呆然と見ていたが穴が閉じることでようやく何が起
こったのか理解できた

「ちよつと瑞穂、なんてことをしたのよ」

あの落とし穴はただの落とし穴ではない
私もここに来て間もない頃に落とされたから
だからこそ分かることもある

「なに、心配するな。落ちても死なないようしている」

それもあるけどもつと重大なことがある
そう、あそこには…

第八話「辿り着いた先は…」

落とし穴に落ちた諒助は
湖の岸で倒れていた

「ぶは〜、いきなり落としやがって一体なんなんだ。あやうくおぼ
れ死ぬとこだったぞ」

と後ろを見る

そこには巨大な湖があった
それはとても広く反対の岸は霞むほどだった

「なんか途中から横滑りになったからそんな気がしたが、まさか本当になるとはな」

瑞穂に落とされた後諒助は落ちて、落ちて、更に落ちて
徐々に角度が変わり最後のほうは滑り台を滑るようになっていた

「そういえば人間で水切りって出来たんだな」

ほんの数分前の事を思い出す

滑り台状態になっても先が長くようやく足元の先の方から光が見えた途端冷たい感触が諒助を襲い足には水との抵抗を受けた

簡単にいえばウォーターライダーだ

実際はその何倍ものスピードだったが

「んで、ここはどこなんだ？」

辺りを見渡すと草木が生い茂って森を作り
地下なので暗いはずなのにまるで地上のように明るく
上を見れば本当に地下なのか疑うほど高い空だった

「地下のはずだけどなんなんだここは…」

* * * *

場所は変わって私立聖祥大学付属小学校

私高町なのはは友達のすずかちゃんとアリサちゃんの三人で昼を食べていました

「そういえば知ってる？昨日木のお化けがでたみたいよ」

思い出したのように話しだすアリサちゃん

話の内容は昨日の事件

私が新たに決意したきっかけ

「そうなの？」

隣でご飯を食べていたすずかちゃんが尋ねました

「へ、へゝそんなことあったの」

自分も返事をするけどなんか声の上擦ってしまいました

「そうなのよ、しかもその木のお化け、結構暴れてたみたいなんだけど忽然と消えたんだって」

「へゝ不思議なこともあるんだね」

「そ、そうだね」

「し・か・も！その化け物が居たのってサッカーグラウンドの近くだったのよ」

タイミングが悪かったら私たちも危なかったじゃない
とぼやくアリサちゃん

ど、どどどしよじ

どづにかして話を逸らさないと

「そ、そういえば、二人ともあの後どうしたの？ファリンさんと鮫
島さんから電話があったんだよ？」

「え！？あゝ、それね。うん、色々あったのよ、ね！さすが」

「う、うん、そうなの」

えーと、なんか気になるなあ

「そうだ、なのはちゃんとアリサちゃんは今度の週末暇かな？」

今度の週末？

「えっとね、お茶会でも開きたいなって」

「へゝお茶会かゝ、…ははゝん」

隣でお弁当を食べてたアリサちゃんが急に怪しい笑みを浮かべ始め
ました

「どうせ忍さんが元気ないんでしょ、だから私達を呼んで、ついで
に恭也さんも呼ぼうって魂胆でしょ」

え？そうなの？

苦笑いをするすずかちゃん

「やっぱりばれちゃった？」

えへんとありさちゃんが胸をはりながら

「あたりまえよ、私を誰だと思ってるのよ」

にやはは、さすがアリサちゃん

「それでなんだけど、なのはちゃん良いかな？」

えーと週末は何も無かったから大丈夫かな
多分お兄ちゃんも無かったはずだし

「うん、大丈夫だよ。お兄ちゃんも用事は無かったはずだし」

「ありがとうなのはちゃん」

ニコツとすずかちゃんが笑顔を見せられました

* * * * *

場所は元に戻って

事務所の地下の謎の空間

「誰か助けてー!!!」

諒助は大声を出しながら走っていた
ただし諒助の後ろには黄色と黒の縞々模様の動物
いわゆる虎が吼えながら追いかけていた

「睡眠の最中に尻尾を踏んだのは悪かった！謝るから許してー!!!」

必死に懇願するが虎が言葉を理解するはずがなく

更に吼えて追いかけてくる

虎の速さは人間を上回っているので逃げる暇もなく捕まって餌にな
っていたかもしれない

しかし実際は諒助は虎に追いつかれていない

理由としては簡単で現在諒助は魔法を発動している

魔法といっても身体を少し強化しているだけなのだが

更にいうならば発動自体は本人の意思ではなく勝手に起きたものだ
言い方を変えれば火事場の馬鹿力ともいう

「はあ、はあ、なんとか逃げ切れた」

逃げること数十分

なんとか虎の脅威から逃れることができた

「しかし、魔法が発動して良かった。あのときは逃げたいと思っ
たら体が軽く感じて早く走れたんだよな」

さっきの追いかけること先日的事件を思い出す

あのときも今回も必死に思ったら魔法が発動した

「やっぱり思いの強さで出来るのか？」

魔法の発動条件をなんとなく理解した諒助はすぐ近くにある木に近づく

枝には美味しそうな果実が実っていた

「腹も減ったし、あれでも食べるか」

軽く屈伸をして果実を取ろうとジャンプする

しかし諒助の手は果実に触れることはなかった

「やっぱり無理か、なら！」

必死に思う

あの果実を取りたいと

「お！なんか少し体が軽く感じる。これなら…そりゃ！」

思いつきりジャンプをすると先ほど以上に跳び果実まで手が届いた

「よし取れた…あっ」

果実に手を届いたせいか気が緩んでしまいそのまま受け身も取らずに落ちた

「いてて、気が緩んだら魔法が解けちゃった」

打った背中を撫で体に付いた葉っぱのなどを払い落とす

「いや、でも魔法の発動条件が分かったぞ」

それから諒助は魔法の特訓をした

さっきの木から果実を取ったり

また尻尾を踏んで虎に追いかけられたり

自分より重そうな岩を持ち上げたり

とにかく色々試していた

「気が付いたらもう夜か」

地下のはずなのに何故か昼夜があり今はもう真っ暗だった

「とりあえず寝るか」

そういうと近くの大木をよじ登り一人が寝れる場所を探しそのまま就寝した

第九話「新たな仲間？」（前書き）

短いですがどうぞ

第九話「新たな仲間？」

諒助が地下に落とされてから四日目
湖の岸で座ったまま動かない諒助

「……………」

必死に気配を隠したただ一点を見ていた
それから数分いまだに諒助は動かずじつと木の棒に集中する
ピクリと木の棒が動くと突然

「フイーシュ！！」

大声を上げて木の棒を自身に引き寄せる
すると木の棒の先から鳶が現れその先には魚が食らいついていた

「よっしゃー！獲ったぞー！」

諒助は釣りをしていた

第九話「新たな仲間？」

パチパチと燃える焚火の近くにさっき獲った魚を棒に通して刺す

しばらくするとこんがりとおいしそうな匂いがして来た

「地下に落とされ4日目。やっと果物以外が食べられる」

思えば大変な日々だった

虎に追い回され

果実を取ろうとすると空から鳥が搔つ攫い

魚を捕まえようにもアウトドアをしたことがないから捕まえ方が分からないし

しかし！苦節4日

やっと魚を食べられる！

魚を獲った感動に浸っていると丁度魚がおいしく焼けたみたいだ

「それじゃあ、いただきます」

と魚に齧り付こうとすると後ろから気配がする

「グルルー」

茂みから虎が現れた

多分魚の匂いで来たのだろう

「残念だがこれは俺がやっと獲った魚だ、お前にはやらん」

俺の言葉を理解したのか虎が襲い掛かってくる

「あまいわー！」

咄嗟に魚を上にはり投げる
虎はつられて上を見た

「そりゃあ!」

一気に虎に詰め寄りチョークスリーパーをかけようとするが虎はつ
なり声をあげ暴れまわる
そのせいで俺は吹き飛ばされ倒れる
その隙を突いて再び襲い掛かるが

「どりゃー!」

向かってくる勢いを使って巴投げをする
虎はそのまま俺の後ろに飛んでいき
ドカンと木にぶつかり気絶をする
そして俺は落ちてきた魚をキャッチする
その間わずか20秒足らず
特訓の成果だ

「それでは再び。いただきますーす」

ガブリと魚に喰らいつく
油が程よくのっついて美味い
丸々一匹食べ終わりまだ焚火に刺さっている魚を手取る
後ろで虎が物欲しそうに鳴いているが無視だ

二匹目もやっぱり美味い
三匹目を食べようとするが後ろでまだ鳴いてやがる
三匹目も食べ終わる頃やっと諦めたのか俺から離れていく
少し離れたところから最後に一鳴きした

ああ、もう!

「分かった！分かったから鳴くな。ほらこれをやるから」

残った二、三匹の魚を虎に与えるとガツガツ食べ始め
食べ終わるとゴロゴロとのを鳴らし甘えてきた

これって懐かれてるのか？

どうしようか？

こうなってしまったのは仕方がない
ならすることは

「どうする？俺と一緒に行くか？」

虎に尋ねると体をスリスリしてきた

.....

諒助は虎を仲間にした！

.....

どうしてこうなった

第十話「修行の成果」

地上から数百メートル以上も深い地下
本来ならそこに空洞があつても真つ暗で見えないはずだが
何らかの理由で地上と同じ光が照らし
これまた地上と同じように植物や動物が生息していた
ただし地上とは違い大型の動物が多い地下世界

「ハアアアー!!」

大きな叫び声で奮い立たせる人間が居た
そこで唯一暮らす人間で名前は柊諒助という

諒助の周りには岩が転がっておりそのどれもが何かで砕かれたよう
になっていた
そして彼から少し離れた小高い丘から自身の何倍もある岩が転がっ
てくる

当たれば確実に重症になるだろうそれを彼は避けない
それどころか

「どりゃー!!」

更に気合を入れた叫びと共に岩に向かって拳を振るう
本来なら当たった衝撃で彼の手が砕けるはずだった
だが実際砕けたのは岩のほうで辺りに残骸を撒き散らした

ふう、と一息ついた彼は先ほど岩が転がってきた丘をみるとそこに
居たのは一匹の大きな虎だった

第十話「修行の成果」

あれから10個ほどの岩を砕いて俺は一息ついた

痛みでジンジンして若干震える手を見つめる

以前なら確実に骨にひびが入っていたはずだが修行のおかげで幾分ましになったようだ

「そつえばここに来てからどの位経ったっけ？

…そつだ10日だ」

地下に来てから10日それだけ経ってここまで成長していなければ
おそらくとつくに死んでいただろうな

まあ何故か知らないけどとても頑丈になったこの体じゃなければ初
日でアウトだったけど

「ガウ
」

色々考えていたらいつの間にか隣には大きな虎がいた

普通の人が見たら危険だと思いかもしれない

でもこいつは大丈夫だ

何故だか俺に懐いてずっと一緒にいる

それとこいつはとても賢く俺の言うことを聞いてくれる

ゴロゴロとのを鳴らして体を擦り付けてきたので俺はのどを撫で
てやる

すると気持ちいいのか目を細めた

「さてと、休憩もしたことだしもう一丁頑張るか。な？セラ？」

セラ

この虎に付けた名前だ

色々と考えたけど本人？の希望で決まった

他にもイリ やり、そのままタイーなんて名付けようとしたけど嫌がれた

fate? そんなの知りません

「ガウ…」

名残惜しいような顔をするがすぐに気持ちを切り替える

ほんとに賢いな

念入りに体をほぐして前を見るとセラは自身の周りにある拳ぐらいの岩を集め終わったよう都在这里を見ている

「よし始めるぞ」

「ガウ！」

開始の合図と共にセラは尻尾を器用に使い岩を取りこちらへ投げつける

そして俺はそれをひたすら避ける

しかもただ避けるだけではなく自身にぎりぎり避ける

頭、足、肩様々な部位を狙われるがよく岩を見て最小限の動きにするそれを数分続け丁度セラの傍に岩が無くなったので終わりにする

「お疲れ、セラ」

「ガ、ガウ…」

ずっと尻尾で岩を投げていたので疲れたのか元気が無い
なので俺は労いの為に頭を撫でる
するとセラは嬉しそうに鳴いた

* * * * *

すずかちゃんの家でお茶をしているときに突然感じた魔力
多分これは…

(なのは！)

念話でユーノ君が話しかけてきます

(うん、すぐ近くだ)

(どうする?)

(えっと、えっと…)

すずかちゃんやアリサちゃんには迷惑掛けないしどうしよう

(そうだ！)

何かを思いついたユーノ君が私の膝から飛び降りて魔力を感じた方
へと走っていきました

* * * * *

なんとかその場から離れてユーノ君と一緒にジュエルシールドがある方向へ向かっている途中で発動したのでユーノ君が結界を張って周りに被害が出ないようにしてくれました。結界が張り終わった途端魔法の光がしたのでそちらを見ると

「ニヤオー」

そこには巨大な猫さんが居ました

ユーノ君が言うにはあの猫さんの願いを叶えたみたい

このままだと危険だから封印をしようとレイジングハートを出したとき突然私の後方から魔法弾が飛んできました

その魔法弾は猫さんに当たりました。

その後も黄色の魔法弾が猫さんに当たり続け猫さんが悲鳴をあげます。

「レイジングハート、お願い！」

このままでは猫さんが危ないのでセットアップをして猫さんの方に飛んで近づき

《Wide Area Protection》

レイジングハートの声と共に薄いピンクの膜が現れます

同時に黄色の魔法弾が膜に当たりました。

なんとか防いで魔法弾が飛んできた方向にレイジングハートを構え

ると目の前の木の枝に誰かが着地します
そこに居たのは黒いバリアジャケットに紺に赤の裏地のマントを着
けた金髪のツインテールの女の子でした。

私が最初に彼女に思ったのはその子が同じ年ぐらいかなって事とな
んだか寂しそうだなということでした。

* * * * *

なのはがフェイトと遭遇した頃

「だぁー！なんでだー！」

「……………」

諒助は黒いコートを着た全身黒尽くめで目しか空いてない白い仮面
をした人物に襲われていた

「やっと人に会えたと思ったのになんで襲われるんだー！」

諒助は黒い人物から逃れるため森の中を走っていた
そして走ってる最中に何故こんなことになったのか考える

- 1 . 修行の後ご飯を食べる為にセラと競争しながら湖に向かった
- 2 . その途中でぼつんと人影をかなり先に見つけたのだ

3・諒助は地下に来てから初めて人間に遭遇したため喜びながら近づいていった

4・そしたらいきなり襲われたのだった

「俺、なんか悪いことしたか？」

今までのことを思い返して一言呟いた

「……………」

黒尽くめの人物はそんな諒助の呟きを知ってか知らずか何も言わず諒助に拳を振るった

「うおー！」

諒助は後頭部に何かが迫ってくる気配で咄嗟にしゃがみこむその後すぐに頭上にヒュンと拳が空を切る音がするその音を聞いて諒助の背筋が凍る

(やべえ、これ受けたら絶対骨折どころじゃねえぞ)

さっきの攻撃が大振りだった為少し動きが止まったのでさっと距離を開ける諒助

「……………」

黒尽くめの人物は無言で諒助に走りより上段蹴りを放つ

「くっ！」

諒助はそれをなんとか避け相手の顔に向けて拳を放つ
しかし拳を右手で受け止められ勢い良く投げられる
投げられた先には木がありぶつかればただでは済まない

「ちっ！」

諒助は魔力で体を強化を施す
強化が終わった直後に諒助の体は衝撃が襲う

「ぐお！」

強化しても衝撃が強かったのかうめき声を上げる
諒助が痛みで苦しんでいるが黒尽くめは気にすることなく跳び蹴り
を放つ

それを転がることで避ける諒助
ドゴンと大きな音を立てて先ほど諒助がぶつけられた木が倒れた

「おいおい、なんで木が折れるんだよ」

倒れた木の傍には傷一つ無い黒尽くめ

「あれだけすごい勢いでいったのに無傷かよ」

あまりの出鱈目加減に呆れる諒助

（しかし、どうすつか。体も限界に近いぞ）

諒助の足は僅かに振るえ
体力が残り少ないと伝えてくる

(仕方が無い、一か八かだけど…)

黒尽くめに向き直り右足を半歩引き両手は胸の高さで構える諒助
それに合わせて黒尽くめも諒助から数メートル離れたところで体を
向ける

「……………」

二人は無言で一向に動く気配がない
互いに向き合って数分

「…！」

痺れを切らした黒尽くめが諒助に突っ込んでくる
ブオンと風を切り諒助の左前頭部に向けて鋭い蹴りを放つ
対する諒助は避ける素振りも見せず構えたままでいる
蹴りがあと数センチで届くその時

「フェイク・てつかい
偽・鉄魂！」

本来なら頭を打ち砕く筈の蹴りは何故か振りぬく事が出来ず諒助の
頭部で止められてしまった

「！？」

あまりの出来事に驚く黒尽くめ
諒助はその隙を逃さず

「…！！」

黒尽くめに目掛け魔力で強化した拳を右フックのように放つ
咄嗟に黒尽くめは諒助から距離を取ろうとするが一瞬遅く拳は左脇
腹にめり込み

そしてそのまま振りぬかれた為吹っ飛ばされてしまう

「はあ、はあ、なんとかあった、か…」

先ほどの攻撃が最後の力だったのか諒助は膝から崩れ落ちバタンと
倒れ気絶してしまった

そんな諒助をボロボロの黒尽くめは見ていた

さっきの攻撃の衝撃の衝撃のせいなのか黒いコートは破れ紅い髪が現れ
白い仮面はひび割れ顔から離れ落ち

それによって現れた髪と同じ綺麗な紅い瞳は諒助の姿を捉え

彼女は微笑んでいた

第十話「修行の成果」(後書き)

なのは「なのはと」

フェイト「フェイトの」

「リリカル通信!!」

なのは「みなさん明けましておめでとございます」

フェイト「おめでとございます」

なのは「一年やってやっと第十話だよフェイトちゃん」

フェイト「そうだね、一年経ったんだよね」

なのは「さすがにこれは遅いと思うの!!」

フェイト「なのは落ち着いて。きっと蒼零さんも事情があったんだよ」

蒼零「そうだぞ!12月は色々忙しかったんだ。24、25日はリア充祝って、年末は東京の即売会に行つてなのはの2010パーカ―(フェイトver.)買つたり…」

なのは・フェイト「……………」

蒼零「あ、あれ?どうしたの二人とも?」

なのは「そ・れ・が・！忙しかったことなの？」

蒼零「あのなのはさん？なんか怖いんだけど…」

フェイト「遊・ん・で・て・！書けなかったの？」

蒼零「フェイトちゃんまで！？あの、えっと、そうだ！実はもう一つ小説を始めまして…」

なのは「スターライト…」

フェイト「プラズマザンバー…」

蒼零「ちょっと待って！やっと時間軸決まったのに！それはA・Sの時間でs・y」

「「ブレイカー！！」」

蒼零「あぎゃー！……！」

なのは「蒼零さんも懲らしめたし今回はここまでなの」

フェイト「多分懲りないから更新は遅いと思うけど見捨てないでね」

なのは「それじゃ、せーの…」

「「今年もよろしく願いします」

蒼零「お、おねがいします…ガクッ」

第十一話「説明と新たな依頼と」

そこはとても白く輝く世界
地球上には存在しないだろうほどの真っ白な世界
なんでまたここに？

あれ？”また”？

俺はここに来たことがある？

色々と考えていると…

「…すけ、りょうすけ、諒助」

どこからか女性の声がする

その声はとても優しく辺りに響き渡る

でもそれは何故か悲しみがこもっていた

「君は誰だ？」

その問いに声は答えない

しかしこの声はどこかで聞いたことがあるような？

どこで聞いたのか思い出そうとしたが一瞬にして世界は闇に染まり
その後落ちている感覚に捕らわれる

「……………ごめんなさい」

意識が消える直前に謝る声が聞こえた気がした

第十一話「説明と新たな依頼と」

顔に何かが触れる感覚がする
撫でるといふよりは舐める

その感覚はつい最近感じた気がする
そうだ確か…

「うん」

軽いうめき声と共に目を開けると目の前には一般人なら確実に驚く
であろう猛獣の顔があった

まあ俺はこの顔を何回も見てるから驚かないけど
つと、それよりもだ

「あれ？ここは？」

俺が起きたからなのかセラがゴロゴロと猫なで声？を出しながら甘
えてきた

若干顔が湿っているのはおそらくセラが舐めていたのだろう

「おはようセラ」

軽く頭を撫でてやる

そこであることに気がついた

自分が寝ていたのは何日か振りの布団

周りを見ると数日しか使わなかった…いや、数日しか使わせてもら
えなかった自分の部屋

「どうして俺の部屋に？」

自分の部屋なのだから居て当たり前なのだが目が覚める前までは森に居たのに

自分の現状に理解できずに困惑しているとガチャリと戸が開いたのでそちらに目をやる

「おはよう、やっと起きたんだ」

フィアナがそこには居た
手には皿と袋に入れて提げられた缶詰が数個

「おはよう、それで手に持っているのは？」

「これ？これはそのこにあげようと思って」

セラの前まで近寄るフィアナ
ちよつと待て、そこまで近寄るとセラが襲い掛かるぞと思っていたら

「はい、どうぞ」

フィアナは皿に缶詰の中身を出してセラに差し出す
対するセラはフィアナに襲い掛かることも無く出されたご飯を食べ
だす

少し驚いた、あんな場所で生活していたから俺以外の人間には懐かないかと思っていた

「そういえばこの子の名前は？」

「セラって名付けた」

「そうなの、セラちゃん可愛いね」

よしよしと頭を撫でるフィアナ

虎に可愛いって…まあ実際懐かれると可愛いけど

「そうそう、あなた体大丈夫？」

「体？ああ、それなら問題ないよ」

軽く腕をまわしてアピールする

若干痛くて顔が歪みそうになるがなんとか堪える
見栄を張るんじゃないかった

「それよりも俺はなんでここに？」

「なんでって、森で倒れてるところを私がここまで運んできたのよ」

運んで？どうやってだ？

一応子供の体だけどそう簡単に運べるか？

実際は大学生の俺を運んだけどな

でも色々な獣が居るあそこで出来るのか？

「なあ、どうやってここまで運んだんだ？」

「そんなの簡単よ。転移魔法で運んだのよ」

そつえばそんな魔法もあったな

あれ？でも確かあそこには俺を襲ってきた黒尽くめが居たはず
そもそもそう都合よく俺を見つけれぬか？

「それじゃあ、近くに全身黒尽くめのやつ居なかったか？というか
よく倒れた俺を見つけれぬな」

「ああ、そのことね」

そついうと俺とセラから少し離れた

その後フィアナの足元に魔方陣が現れる

えつとあれはミッド式かな

彼女の髪と同じ綺麗な紅い魔方陣が回転する

数秒後フィアナが光に包まれ現れたのは黒尽くめの人物

「な！？その格好は」

「驚いた？私の変身だったのよ」

すぐに変身を解いて元の姿に戻るフィアナ
なるほどフィアナが黒尽くめなら簡単だな

「あれ？でもさ。最初に俺をどうやって見つけたんだ？」

「あのね、私は魔法が使えるのよ。探すのなんて簡単よ」

そついえば探索魔法なんてものもあつたな

「見つけた理由は分かったけど、どうして襲ってきたんだよ。あと
セラがここに居る理由も」

前者はなんとなく分かる本当は分かりたくなかったな
けど後者はなんでだろ？同じ人間だけど初対面でそう簡単にセラが
フィアナの言うこと聞くとは思えないし
というか根本的にいうとあの場にはセラは居なかったし
おそらく湖に居たんだと思うけど

「瑞穂がそろそろ力の使い方が分かってきただろうから確認してこ
いて。それとセラを見つけたのは偶然よ」

「やっぱり瑞穂さんの仕業か。それで偶然って？」

「あんたを運ぼうとしたら現れて、あんたを守ろうとしてたのよ」

そうだったのか、セラはやっぱり良い子だな
今度おいしい肉でも買ってやろう

「それで餌をあげたら付いて来ちゃったのよ」

前言撤回

知らない人からものを貰っちゃいけません

「これで大体説明は終わったわよね。それじゃ次はこっちが質問す
る番。最後に放った私の拳をどうやって防いだのよ？シールドとか
張ってなかったけど」

あれか、どうやって説明しよう

漫画の技ですって言っても伝わらないだろうし
実を言うと俺もはつきりとは分かんないんだよな
なんかやるうと思っただけなら出来たし

「えっと、あれは拳が当たる瞬間に魔力を一点集中して強化したんだよ」

本当は魔力とか意識せずに力を籠めただけで

まあ、おそろくさっきの説明通りになっただけは…多分

「へへ、すごいじゃない。こんな短い期間であんなことが出来るなんて」

「そりゃ、あんなところに放り込まれて、成長しないほうが難しいでしょ」

「それもそうね」

ニコツと笑うフィアナだがこつちとしては笑えないぞ
常に死と隣り合わせなんて

「俺がここに居るってことはもう修行は良いんだよな？」

また行けと言われても困るんだが
そんなことを考えてると部屋のドアが開いた

「ああそれなら問題ない。さっき新しい依頼が来てな。それをやって欲しいんだ」

現れたのは瑞穂さん

眼鏡を外して仕事モードだ

ちなみに瑞穂さんが眼鏡をかけているときは一般人モード（俺命名）
でとても優しいお姉さん

外してるときはさっきも述べた仕事モード（これも俺命名）でこの

時は碌でもないことを俺にさせようとする
なんというか某魔法使いの姉の某人形師みたいだ

それにしても依頼か
どんなのだ？

「明日からとある方の護衛をしてもらおう」

護衛か

一体どんな人物なんだろうか
きつとどっかがたいの良いい偉いさんだとか髭の生やしたお爺さんとか

そんな人物像を色々考えていたからなのかその時瑞穂さんが怪しい
笑みを浮かべていることに気付くことが出来なかった

第十一話「説明と新たな依頼と」（後書き）

フェイト「フェイトと」

蒼零「蒼零の」

「リリカル通信」

蒼零「さあ始まりました、リリカル通信」

フェイト「えっと、どうしてなのはが居ないの？」

蒼零「ああそれはこれを見てくれ」

フェイト「これ？ああ、なるほど」

なのは「フェイトちゃん、蒼零さんどー」

蒼零「なのはちゃんこっちだよ」

なのは「あっ！蒼零さん、それにフェイトちゃんも。探したんだよ
…あれ？もしかしてもう始まつてる!？」

蒼零「やっと主賓が来たな」

なのは「主賓？」

蒼零「それじゃ、フェイトちゃんいくよ。せーの」

「「なのはちゃん誕生日おめでとう!!」」

なのは「え!?!誕生日覚えててくれてたの?」

蒼零「そりゃそうだよ。大事な主役の誕生日ぐらい覚えてるぞ。」

フェイト「おめでとう、なのは」

なのは「ありがとうフェイトちゃん」

蒼零「あの?俺は?」

なのは「蒼零さん、誕生日を祝ってくれるのは嬉しいけど...」

蒼零「けど?」

なのは「私の誕生日は3月の15日なんだよ。今は16日、もう過ぎてるよね?」

蒼零「あ!?!」

フェイト「ご、ごめん

なのは。一日遅れて」

なのは「フェイトちゃんは良いの友達だから」

蒼零「何この扱いの差」

なのは「だってもう一年以上経ってるんだよ。ということとは以前に誕生日を祝ってくれないとおかしいよね?」

蒼零「あの、なのはさん。目がなんか笑ってないように感じるんですが。ああ！そうだ！なのはちゃんにプレゼントだよ！次話で登場できるようにするから！！」

なのは「うん それなら許してあげる」

蒼零「こえ〜、まあ何とかなっただし良いか」

なのは「それじゃ次話も！」

なの・蒼「よろしくお願いします！」「」

フェイト「しくしく、今回私最初だけしか喋ってない」

なの・蒼「あー！」「」

第十二話「護衛任務?とその裏側」

あの誘拐事件から数日が経ちました
いまだに私とアリサちゃんを助けてくれた男の子が誰なのか分かり
ませんでした

一目で良いからお礼を言いたい
そんな思いでいっぱいのある日

「親の都合で転入してきた柊諒助です。よろしくお願いします!」

先生の横で自己紹介をする男の子
私は彼と再び出会いました

第十二話「護衛任務?」

諒助が地下から戻ってくる前日
とある建物の前に一人の女性が居た
さっと彼女の紫色の長髪を風がなでる

「確かここのはずよね?」

そう呟く彼女の手に持っているのは地図
それはここまでの行き方が書かれたもので彼女はそれをもとにやっ
て来たのだ

しかし彼女は目の前にある建物が目的の場所であるのか疑問に感じ

ていた

それは鉄筋コンクリートの四階建てで塗装などはされておらずコンクリートの地の色が晒されていた

一階は駐車スペースになっっているが車は停まっではおらず隅には錆付いたドラム缶が置いてあった

二階から居住スペースのはずなのだが四階は半分ほど崩れていて災害や戦争で壊されたように見える

総じて言えばこんな所に人が住んでいるとは彼女は思えなかった

それでも彼女は臆して帰ることはせずその建物に入っていく

その後目的の場所があるだろう二階へ行くために階段を上る

こつこつと階段を上る度に音は反響して少なからず怖さがある

しばらく上ると横幅が狭く両手を伸ばせば簡単に付いてしまうほどの通路があった

そこを数歩進むと横に曇りガラスがはまったスチール製の扉があった

女性はふうと一息つくとその扉をノックする

「どうぞ、開いてますわ」

中から声がかかりそれに合わせて扉を開ける

最初に目に入ったのは応接用の大机とソファ―

「いらつしやい、待ってましたわ」

そのソファ―に座って居たのは眼鏡をかけた女性

水色のショートヘアの彼女は微笑んでいた

それから数分後

事務所にやってきた女性は応接用のソファ―に座っていた

「こんなものしかありませんけどどうぞ」

そう言つて眼鏡を掛けた女性、国崎瑞穂は事務所にやってきた女性に紅茶を出す

「ありがとうございます」

紅茶を受け取った女性は一口飲む

「それでここに来られた理由を伺いましょうか？」

瑞穂は対面に座り用件を聞く

「そうですね、まずはお礼を言わせてください」

「一体何の事かしら？」

「ふふつ、惚けなくても大丈夫ですよ。あの事は誰にも、もちろん警察にも話していませんから」

「そうですね、でも唯お礼を言いに来た訳でも無いでしょう？」

「そうですね…」

女性は紅茶のカップを取り一口ほど飲んで静かに机に戻す

「護衛を頼みたいんです」

「護衛、ですか？」

「ええ、そうです。実は今回の犯人は雇われた者で黒幕は他に居るみたいなんです。しかもその黒幕の目的が金銭ではないみたいで…」

「というところ？」

続きを促された女性は一呼吸間を空けて話を繋ぐ

「そうですね、簡単に言えば一族の怨みですね」

その言葉を聞き瑞穂は少し考え

「なるほど、身代金目的ならなんとかなるが怨みでの犯行では命の保障が出来ないと。そういうことですね？」

女性が危惧する事態を話す

それを聞いた女性はこくりと頷く

瑞穂は冷めてしまった紅茶を飲み干し口を開いた

「分かりました。その依頼受けましょう」

「ありがとうございます」

「それで護衛にあたって手配して欲しいものがあるんですが」

「なにをですか？」

女性が詳細を尋ねるとニヤリと瑞穂の口角が上がっていた

* * * *

「親の都合で転入してきた柊諒助です。よろしくお願いします！」

自己紹介をして頭を下げる
するとパチパチと歓迎の拍手が起こる

「柊君はあの席、月村さんの横の席に着いて」

担任の先生が指した席に向かい着席する
そのわずかな道中で周りに視線を巡らす
自分の席は窓側から二列目の一番後ろ
その席から窓側にすずかが座っておりすずかの前にアリサがそして
その隣になのはが座っていた
なぜだかアリサがこちらを凝視している気がするしすずかはなにやら呆けていた
なのはは新しい生徒が来たから興味津々といったところか
自分の席に座り鞆から筆記用具と教科書を出し机にしまう
ふと視線を感じたのでそちらに目をやる
さつとアリサが顔を黒板へ戻す姿が見えた

「あっ、あの、柊君」

アリサの行動を怪訝に思っていると隣のすずかから声がかかる

「どうした月村？」

「えっと、その、なんでもないので、ごめんなさい」

何も用件を言わずに黒板の文字を書き写したすすずか

そんな二人の様子を見て首を傾げるのはがいた事を追記しておく

まあその後は何事もなく授業は進み休憩ごとに俺の周りに人が集ま
って質問をしてくる

質問は出身地から好きな食べ物、果てはそんなこと聞くなと言いた
くなるものまであった

ちなみにその一部を公開するところだ

Q：前はどこに住んでいたの？

A：北海道（大嘘）

Q：趣味は？

A：読書と町めぐり

Q：好きな食べ物は？

A：色々あるけどラーメンかな

Q：はあ、はあ、ね、ねこみみは好きでござるか？

A：俺はどつちかと言うといぬみmっておい何言わせる

Q：やらないか？

A：……………

とまあこんな感じで質問責めにあつた

ちなみに後ろ二つの質問した奴を殴つた俺は悪くない

小学生でそれはやばいだろ

他にも質問が多々あつたがなんとかやり過ごし4時間目の授業

はっきり言えば暇だ

俺は見た目が小学生でも中身は大学生だ

この時期の問題なんて理解しているため何もすることが無い
その為少しうつらうつらしている

隣から小さい紙を丸めたものが投げ込まれた

投げた相手はとうとうこちらを見ずに少し俯いていてその前の席の
少女はガン見していた

その眼は早く見ると語っている

何が書いてあるんだろうと先生にはれないように広げて見る

お昼になったら屋上に来なさい。

逃げたら殺す

と屋上へ呼び出し状だった

仕方がない、どうせ説明する気だったしちょうど良いかな

そう考えながらまだ半分はある授業を睡眠時間へとかえるために腕
を枕にして眠りにおちた

第十三話「おはなし」

授業終了のチャイムがなり生徒達が動き出す

机をくっ付け合うもの

購買へと走り出し先生に叱られるもの

暖かい外へ出て行くもの

学校生活において一番至福の時間であるお昼休み

皆が和気藹々としてる中で俺はというと屋上にいた

「さあ話してもらおうかしら」

「アリサちゃん、目が怖いよ」

ものすごい形相でこちらを睨むアリサ

それを必死に抑えようとするはずか

全く折角のお昼休みという俺達学生には大事な時間だということにこいつは

「話す？何をだよ？」

見当はついていないが知らないふりをする

「あなたね！惚けるんじゃないわよ！私見たんだからね。倉庫で私達を助けられた時にあなたの顔を！」

「アリサちゃん落ち着いて。ごめんね柊君、でも私も教えてほしいな」

片やグイグイこちらに近づくアリサ

片やそれを止めようとしながらも尋ねるすずか
これになのはがいたらどうなるんだらうと思ひ至りふと気づく

「あれ？高町はいないのか？」

「なのは？あの子は教室で弁当を食べてるわよ。さすがにあの子に聞かれたくなかったしね、私達が誘拐されたこと。それよりも早く吐きなさいよ」

なるほど、さすが友達思いのツンデレは違うな

それはおいといてだ、さてどこまで話すべきか考える
それも数秒で終わらせ話し始める

「あれは偶然だよ偶然」

「偶然？」

「ああ、丁度仕事が終わって帰ろうとしたら目撃したから追いかけたんだよ。まあその時は君達二人だとは思わなかったけど」

ここまででは嘘偽り無く話す

「仕事？」

話の内容で気になったのかすずかが尋ねる

「そそ、仕事だよ。家は色々な仕事をしていてね、所謂何でも屋つてところかな」

まあその中身は猫探しから盗みまでまさになんでもするけどな

まさか盗みまですると聞いたときは驚いた
でもそれは話さない、そのせいで二人に被害が行かないように

「ふうん、何でも屋ね」

「というか月村は知ってるだろ？」

だってあの時の依頼主は月村家なんだから

「え？」

「…え？」

まるで私は知らないという感じでこちらを見てくる

「知らないのか？まあ関係者だから話すけどあの日捜索してた猫が
帰って来ただろ？あれうちが捕まえたんだよ」

「そうだったんだ、ありがとう柊君」

ぺこりと頭を下げ感謝の意を表すすずか、本当にいい子だな

「仕事は分かったけどどうしてあんたがああ倉庫にいたのよ」

「えっと、まああれだよ。恩を少しでも売って仕事を増やそうって
ところかな」

そんなことであそこに居たのとため息をつくアリサ
俺も本当は嫌だったんだよ、実際に撃たれたし

「それじゃ次の質問ね」

え？まだあるの？

「なんであんた転入してきたのよ。この時期に来るのはおかしいでしょ」

どうしようかこれは話すべきか

そう思いちらりとすずかを見ると偶然目があつて首を傾げられる嫌だめだ、ここで話したらずずかの学校生活に支障がでる

「いやなんというか、これもまた偶然なんだよ」

「本当に〜？」

アリサがジーと私怪しんでますみたいに見てくる

「なに、親がちょっと事故にあつてね。それで親戚の家に来たというわけさ」

「っ！？ごめんなさい、そんなことがあつたなんて知らなかったから」

嘘をついて誤魔化すが少し良心が痛むな

そんな嘘を受け止めバツの悪そうな顔をしながらもしっかり謝るアリサ

やはりこの子も良い子だ、ツンデレだけど

「まあいいさそんなことは、それより良いのか？」

「何がよ？」

何のことか分からないのアリサ、同じくすずか
お前らな今何時だと思ってるんだ
そう言おうと思っていいたら学校の予鈴が鳴る

「「あつ昼食！」」

ようやく気づいた二人は急いで下へ降りていく
ちなみに俺はここへ来るまでにおにぎりを二個食べたりする
もちろん俺の手製の

本当は購買で買う予定だったけどね…昨日瑞穂さん何か買ったみた
いで今月の給料が払われるのが怪しいという話が無ければね

「さてと、そろそろ俺も行かないと」

屋上から校庭を見下ろすと遊んでいた生徒はほとんど教室に戻って
いる

おっと、俺も急いで戻らないと先生に怒られる
転校初日から先生に目をつけられたくないしね

第十四話「ここは湯の町 海鳴旅館」

海鳴市の郊外にあるとある温泉街

そこに諒助とフィアナが居た

片や両手と背中に大量の荷物

片や手ぶらで鼻歌を歌っていた

どちらがどちらかはここではあえて述べない

「何やってるの？早く来なさいよ」

温泉街をどどん歩くフィアナが自分の後方にいる諒助に話しかける

「いや、ちよつと待って…」

対する諒助はというと大量の荷物で息が少しあがっている

幾ら身体能力が向上しても限度があった

温泉饅頭や温泉煎餅、温泉卵に温泉コーヒ、こけしやら湯の花やら
様々な物があった

中には温泉缶なんていうのもあった

もちろんそれは全て諒助が持っている紙袋に入っていたりする

「普通お土産は帰りに買うだろ。というか買いすぎだ」

「別にいいじゃない、それに帰りには無いかもしれないじゃない」

文句を言う諒助に対してフィアナはしれっと答える

「いや、でも…」

「ほら着いたわよ」

諒助の文句を遮りフィアナは目的の場所に着いたことを伝える

旅館 山の宿

辺りは木々に囲まれ近くには小さいながらも池があり、大きな鯉が泳いでいる

まさに山中の宿といった感じだ

「ほえ、すごいな」

諒助が旅館に感心しているとようこそおいでくださいましたの言葉と共に旅館の女将が現れる

「あの予約していた国崎ですけど」

「国崎様ですね、お待ちしております。どうぞ中へ」

フィアナが女将と少し話をした後

女将の先導で中へと案内されていく二人

途中何人かの仲居さんが諒助の荷物を持ちそれに諒助が大変感謝をすることがあったとか

第十四話「ここは湯の町海鳴旅館」

事の始まりは昨日のことだった
授業も終わりすずかに護衛だとはれないように自宅へ送り届けた諒
助が事務所に帰宅したときだった

「温泉に行くわよ！」

扉を開けて聞こえた第一声はそれだった

「いきなりなんだよ、温泉に行くって」

「ふふん、これを見なさい！」

帰ってきて早々に言われて全く理解出来ない諒助

その発言によくぞ聞いてくれましたと言わんばかりの顔でフィアナ
が一枚の小さな紙を見せ付ける

「えつとなになに…」

紙には温泉の絵が書かれており絵の上の方に文字が書かれていた
その文字を読むと温泉旅行ペアチケットと書かれていた
どうやら温泉の招待状のようだ

「どうしたのこれ？誰かから貰ったの？」

「そうなのよ！瑞穂が依頼の報酬として貰ったのよ！」

ハイテンションなフィアナと若干苦笑いの瑞穂

どうやら瑞穂もフィアナのこのテンションに困ってるみたいだった

「急で悪いけど、あんた準備しなさい」

「は？準備って？」

「もちろん宿泊の準備よ、期限が明後日までなのよ。瑞穂は用事で行けないみたいだし、あんたを連れてってあげるわ。ほら早く準備しなさい」

「えっ、ちよつと、分かったから押すなって」

フィアナに急かされ準備へ向かう諒助

数時間後二人は荷物を持って事務所を出て旅館へ行くためにバス停へ向かったのだった

* * * * *

「は、いい湯だな」

荷物を部屋に置いた諒助は旅館内のお土産コーナーで何を買うか悩んでいたフィアナをそのままにして露天風呂へとやってきていた

「それにしてもこんな高級旅館に泊まれるなんて夢のようだな」

事前に調べた結果、この旅館は高級旅館だというのが分かったお値段にしてうん万円

そんな旅館に貧乏人間近の自分が泊まれるとは思っていなかった

「それにしても瑞穂さんどうしたんだろうな？なんか用事があるって言ってたけど」

本来フィアナと来る筈だった瑞穂は急に入った用事により来れなくなった

しかしその用事がなんなのか諒助だけではなくフィアナにすら教えなかった

「どうせどっかでオークションとかがあってそこに行ってるんだろ
うな」

瑞穂達と生活してなんとなくだがどのような人物か分かった諒助は
そう推論する

「さてともう少しのんびりs」「うわあ、やっぱり広いわね！」「ん？」

ゆったりしようとしていた諒助に聞こえた声女性の、少女の声
それに気付いた諒助はさっきまで背にしていた竹の壁の方を見る

「ほづらユーノ、大人しくしなさい！」

「キューー！！」

「あっ！？こら逃げるな！」

壁の向こうにあるだろう女性用の露天風呂から数人の女性の声と動
物の声が聞こえた

（あれ？この声って？）

どこかで聞いたことある声に疑問を感じていると男性側の室内風呂から気配を感じて見ると誰かが露天風呂へやってきた

(もしかしてこの人って…)

黒い単発の十代の男性

高町家の長男である高町恭也だった

それに気付いた諒助はパニックに陥る

(え!?! って事はあの声はアリサとユーノか!!)

そして壁の向こうに誰が居るのか分かったが諒助はそんな場合では無かった

「やあ、こんにちわ」

「あつ、こ、こんにちわ」

恭也に声を掛けられ若干震えながらも返事をする諒助だが内心ガクブルだった

(なのは達が風呂から出る前に出ないとやばい!)

諒助の頭によぎるのはなのはの兄である高町恭也の特徴

どの二次小説でも出てくるシスコン兄貴

ここで自分のことを知られたら朝日が拝めなくなると分かった諒助の行動は早かった

風呂からサツと出て体を恭也に軽く会釈をしつつ屋内風呂へ

シャワーで軽く汗を(この場合恭也に会ったことによる冷や汗)流し

体に付いた水分をある程度タオルで取って更衣室へ入る

乾いたタオルで体を拭き、さっと着替え、頭を乾かすことなく風呂場から出て行った

時間にしてわずか3分

行水するカラスもびっくりのタイムだった

「あれ？諒助どうしたの？って、ちょっといきなり引っ張らないで！」

部屋に戻る途中でフィアナと出会い

その身柄を確保して部屋へと戻る

「もう！いきなり何よ！」

「ごめん、ちょっと会いたくない奴らが居たから」

「誰よ？会いたくない奴らって？」

「高町達だ」

その後部屋に戻った諒助はフィアナに怒られるが謝りながらも説明する

昨日すずかの護衛の途中で明日、つまり今日温泉に行くのだが一緒に行かないかと

転校して皆と仲良くなれるか戸惑っているのではないかとなのは達の気遣いだったのだが諒助はそれを断った

なのにここに居ることがばれたら何を言われるか堪ったものではない特にアリサから

「ふーん、そういうことなら仕方が無いわね」

「本当にごめん」

なんとか納得してくれたフィアナに手を合わせて謝る諒助

「それじゃここに居たら鉢合わせしそうだし、外へ行きましょうか」

「えっ！？いや俺はこのまま部屋でのんびりほら行くわよ！」ちよ、襟を引っ張るな！」

このまま部屋で過ごすとする諒助をフィアナは襟を掴んで引き摺りながら部屋を出て行く

お土産どうしようかなとフィアナの声とまだ買うのか！と荷物持ちの諒助の声が聞こえた

第十五話「その金髪の少女は」

なのは達が同じ宿だった事を知った俺はフィアナと一緒に温泉街へ繰り出した

丁度連休だった為色々な出店などが出ている

「おつ、温泉饅頭だ。食べようぜ」

「そうね、折角温泉街に来たんだから食べないとね」

人混みを抜けながら歩いていると出来立ての温泉饅頭を売っているお店を発見する

「おばちゃん、温泉饅頭2個ね」

「はいよ、ボクはお姉ちゃんと来たのかい？」

「え？いや、ちが…うん！そうなんだ！」

お店のおばちゃんに注文したら姉弟に間違われたそりゃ、どう見てもそれ以外には見えないけどさ

勝手に勘違いしているおばちゃんに説明しようとしたけど面倒なので誤魔化す

後ろに立っていたフィアナの溜め息が聞こえた気がするけど気付かなかったことにする

「そうかい、ほら1個オマケしてあげるからお姉ちゃんと分けて食べな」

「わゝ、おばちゃんありがと〜」

蒸籠から饅頭を取り出して渡してくれる時に1個サービスしてくれた子供ってすげ〜

子供体型になって初めて良かったと思った

「よっしゃ！ぬいぐるみゲット！」

「なんで当たらないのよ〜」

あの後出店巡りをして現在射的をやっている

俺はお菓子やぬいぐるみ落としたけどフィアナは残念ながら0個
ムキになって何回も挑戦するが悉く失敗して最後は銃が悪いんじゃないかという始末

仕方がないので俺の取ったぬいぐるみを渡して機嫌を取ったりした
その後もアクセサリー屋とかまわったけど終始姉弟に見られて落ち込んでいたのは内緒だ

「いや〜楽しかった、こんなに楽しんだの久しぶりだな」

帰り道夜風に当たりながら歩いていた

それにしても何ヶ月ぶりだろうかこんなに遊んだのは

最近色々あって忙しかったし、大学生のときも講義やらバイトで
一日中休みはあの時ぐらいだった

「そうね、私も久しぶりね」

隣を歩くフィアナを見ると、彼女も楽しかったらしくニコニコしている

その顔と月明かりを反射して綺麗な髪がキラキラしていてとても美

しかった

「どうかした？」

「ううん、何でもない」

こちらを見ているのに気づいたフィアナが微笑みながら聞いてきたけど、なんか恥ずかしくて顔を背けつつ素っ気無く返事をする

「さてと、後は寝るだけだなあ…ん？」

「どうしたの？」

「いや、なんでも無い。もう少し風に当たってるから先に帰ってて」

「？、そう、分かった。それじゃ私は温泉でゆっくりしてくるわ」

あと少しで宿に着く時、道から少し外れた所の樹の枝に誰か居るのに気づいた

おそらくあの子だろうと思いフィアナを先に帰らせる

少し疑問に思ったのかこちらの顔を見ていたけど帰ってくれた

フィアナの姿が見えなくなるのを確認した後俺はその樹へと近づいていった

「母さん…」

樹の下までやって来た俺は枝に腰掛けている少女を見ると何かぼそぼそと呟いていた

黒のワンピースと同じく黒のソックス

黒いリボンで留めた金髪ツインテール
寂しさが滲み出ている綺麗な顔の少女

フェイト・テストロッサ

彼女が一人寂しく月を眺めていた

「私はどうすれば良いのかな、おしえてリニス」その君、そんな
所で何してるの?」「え?...きゃ!」

「へっ?うわっ!」

声を掛けられて驚いたのかフェイトは体勢を崩して落ちてきた

俺の真上に

「あぐっ!」

フェイトを綺麗に顔面キャッチした俺はそのまま倒れた
頭を打って数瞬意識が無くなり目が覚めると何故か視界は真っ暗だ
った

でも何やら柔らかい感触が...まさか!!

「イタタタタ、あの大丈夫ですk...きゃっ!!」

「ご、ごめん!!」

簡単に言えばフェイトが俺の跨っていた訳で

それに気づいたフェイトはサッと動いて顔を赤らめている
それで俺は謝りながら土下座をする

服は黒だったけどパンツは…はっ！俺は何をしてるんだ

「うっ」

「本当に悪かった、まさか落ちるとは思わなくて」

未だに顔は赤く、若干涙も出ていて罪悪感が急上昇中だ

「いえ、私も気を抜いていたから」

なんとか冷静になったフェイトがフォローしてくれるが目の端に涙がまだ残っている

うお~~~~！！！！俺はどうすれば良いんだ！！

「あの？大丈夫で…まさか！？、ごめんなさい、ちょっと用事が出来たので失礼します」

俺が頭を抱えながら唸っているとフェイトが話しかけてくるが何かに気づいたらしく驚きの表情になっている
しかしそれも数秒で、真面目な顔になって走り出してしまった

「えっと、え〜と。どうすればいいんだ？」

急展開について行けず一人取り残された俺の呟きは誰にも聞かれること無く夜空に消えていった

第十五話「その金髪の少女は」(後書き)

フェイトファンの方は申し訳ありません

なんとなくフェイトフラグを立ててみようかなと書いていたらこんな話にな

普通に考えたらこれって逆に折ってますよね？

第十六話「のんびり観戦」

空には月が輝き、辺りがシンと静かになった夜
俺は部屋の窓から双眼鏡であるものを覗いていた

それは湯煙立ち昇る温泉…ではなく、夜空を桜色と金色の魔力光を
撒き散らしている二人の少女を見る

茶髪のツインテールで白を基調としたバリアジャケットを纏う少女、
高町なのはと

金髪のツインテールで反対に黒を基調としたバリアジャケットを纏
う少女、フェイト・テストロツサ

この二人の戦いを俺は見ている

「それにしても凄いわね、諒助の友達なのはって子。魔力が多
すぎよ、あの歳でこれは異常ね」

俺の隣で同じく双眼鏡で見ているフィアナが驚きの声をあげる
魔力がどうかと言われても俺は分からないが戦いを見ているとす
ごさは分かる

アニメで見たより魔法の迫力が凄い
音は聞こえないけどゴウツ！って聞こえそうだもん

「まあ、対するあの子も魔力が凄いわね。しかも戦いに慣れてる
みたいね」

さすがフィアナ、よく分かったなと思ったがよく見ると俺でも分か
った

なのは動きが大きいけどフェイトはある程度見切って避けている
「でき、思ったんだけど、結界は張らないのかな？こんなにうるさいのに」

確かにそう思う

勝負が始まったのに気づいたのは多分フェイトがジュエルシードを封印したときだと思う

なんかゴロゴロと雷みたいなきもしたし

フィアナは魔力が爆発的に高まったのを感じたみたいだけど

「うーん、多分部屋に防音処理でもしてるんじゃないかな？廊下の音は聞こえないし」

あれだけドカドカやってるのに騒ぎになってないのは防音してあるからじゃないと考えられない

あるいはこの宿の宿泊客含めて全員がスルースキルがあると考えられる…わけないか

アニメだから都合主義としとくか

「まあそういうことにしとこっか…あ、砲撃勝負してる」

「まじで!？」

説明の為に余所見してる内にやっぴたみたいだ

慌てて見るとフェイトとなのはの砲撃魔法が衝突してるどころだった

「ねえ、なのはって子は最近魔法を知ったんだよね？」

「うん、瑞穂さんの資料でもそう書いてあった」

昨日宿へ行く準備をしてる時になのはの資料を貰った
いつの間に！？と思っただけど、瑞穂さんだから仕方が無い
その時パラパラと軽く見たが最近までは魔力が高い一般人だったと
書いてあった

俺の原作知識でも本当について最近だ

「それであの威力の砲撃魔法、いるんだね天才って」

若干皮肉が混じったフィアナの感想だけど正にその通りだよな
一応主人公なんだしね

「それで、使い魔同士が勝負…じゃなくて、追いかけてこだね」

双眼鏡を動かして違う場所を見ているフィアナ
俺も動かして見るとユーノとアルフの追いかけてこが見えた

ユーノが茂みで上手く隠れながら、でも諦めてフェイトの加勢に行
かない位のタイミングで姿を現して逃がっている
対するアルフもフェイトの邪魔をさせない為に追いかけるが、隙あ
らばなのはを襲おうと動いているのが窺える

「あ！決着が着いた」

「何！」

フィアナの言葉で双眼鏡を戻すが既に遅くフェイトとアルフが去っ
て行く場面だった
ちくしょうが！

「今晚はもう終わりだろし寝よつか」

「そうだね、はあ、見たかったなあ」

その後何も無いと分かったのか、双眼鏡を片付けて布団に入るフィ
アナ

俺も窓を閉め、双眼鏡を片付けて布団に入る
さすがに窓辺に居たら気づきそうだしね

ちなみに布団はちゃんと別々です

第十七話「心配事と暴走と」

「いい加減にしなさいよ!」

怒声と机を叩く音が俺の前の席、つまりはなのはの席で起こり教室が一瞬静まり返る

机を叩いた本人、アリサは怒りをそのままに手を腰に当ててなのはを睨んでいた

「こないだっから何を話しても上の空でボーっとして!」

「あっ、ごめんねアリサちゃん…」

怒られたなのはは俯きながら答える

そしてアリサと一緒に居たすずかはそれをオロオロしながら見ていた

143

「ごめんじゃない!私達と話してるのがそんなに退屈なら、一人でいくらでもボーっとしてなさいよ!いくよ、すずか」

言うことだけ言ったらさっさと教室から去って行くアリサ
それを戸惑いながら追いかけるすずか

「怒らせちゃったな…ごめんね、アリサちゃん」

アリサが去ったことでピリピリした空気は無くなり、各々がまた雑談を始める

そんな中教室に残ったなのははぽつりと呟く
そこで俺は漸く思い出した

確か原作通りなら三人娘の思い出が展開されるはず

「はあ、どうしよう…」

なのはが未だに落ち込んでいるのだが俺はなのはの後ろの席のため
凄い気になる

多分このままにしておくかと授業中もずっと暗いままだろうなあ
はあ、仕方が無い

「どうしたんだ高町？」

「ん、柊君。何でも無いよ」

さっきアリサも言ってたけどどう見てもなんかあったら
理由は知ってるけどさすがに魔法の事か？なんて言えないし
そうだ！

「おいおい高町まさかあれで悩んでるのか？」

「え？あれって？」

なのはは言っていることが分からないのか首を傾けている
適当に言ってるから分かるはず無いけど

「まあ高町も女の子だし気になるよな」

「えっと、なんのこと？」

「それで何キ口増えたんだ？」

「じゃー！そのことじゃないよー」

体重の事だと気づいたなのは顔を真っ赤にして抗議する

「そうなのか？家が喫茶店だと大変だよな。特にデザートが美味しいとな？」

更に弄るとなのは下を向きながらプルプルと体が震えてる
さて、次の授業までとんずらするか
さっと教室から出るために走り出す

「だから違っつて言ってるでしょー！！」

教室の戸を閉めて廊下を走り出したとき、なのはの大声が聞こえた
あんだけ声が出てれば大丈夫だな

「さて、どうしようかな…ん？」

教室を出た俺はぶらぶらと歩いていると階段から声がした
ひょっこりと顔を出すとアリサとすずかが話をしていた

少しは役に立ちたい
無理でも話を聞いて一緒に悩んであげたい
だってそれが友達というものなんだから

そんなアリサの思いを聞いて少しウルツとしてしまった
感動しているとアリサ達がこちらに向かってくるみたいなのでさっ
さとその場を後にした

* * * * *

「起立、気をつけ、礼、ありがとうございました」

日直の言葉に続いて皆が揃えて挨拶をする

それを先生は笑顔で答えて教室から去って行く

先生が去ったのを確認するとこの後どうするか？など雑談を始めた
り、教科書を仕舞って帰宅したりと各々が行動を始める

俺も鞆に荷物を入れて教室を出る

今日はすずかは車で帰るので護衛は必要ない

なので今日はどうしようかなとぶらぶら歩いていると

「柊、一緒にサッカーしようぜ」

「おう、分かった」

校庭に出るとクラスメイトの一人が声を掛けてきた

それを了承してサッカーを始めた集団に混ざる

入学したのは護衛が目的だからわざわざ皆と仲良くしなくても良い
けど、さすがにねえ？

サッカーの結果？当然唯の小学生には負けなかったぜ！

* * * * *

「じゃあな柎、また明日」

「ああ、また明日」

日が暮れるまでサッカーを楽しんでクラスメイトと別れた帰り道

「そつだ、スーパーに行かないと」

そういえば冷蔵庫の中にほとんど食材が無かったなと思出しスーパーに向かう

さて今日は何を作ろうかなと考えていると

「ん？あれは…」

ふと脇道を見ると何やら輝く物が落ちていた

なんとなく嫌な事が起きそうだな〜と思いつつも近づいて手に取る

それはひし形で角は丸くなっており、色は青く宝石のような物だった

「ちよつ！？これって…」

やばいやばいやばい！

これってもしかしなくてもジュエルシードじゃねーかよ！

今日が原作の思い出の話なら…って空が雲で覆われてるじゃん！？

「間に合え〜！！」

記憶が確かならこのジュエルシードを覚醒させる為にアルフが魔力を流してるはず

覚醒したときに近くに居たら飲み込まれる可能性がある、いや絶対

飲み込まれる

そんなのは真つ平ごめんなので力一杯に遙か彼方へと投げ
それに合わせて空は雲で真つ暗で雷が至る所に落ちている
これって誰か死んでないか？

「うお！まぶしっ！」

放物線を描いていたジュエルシードは雷に打たれると空中でびたり
と止まり光の柱が立つ

危なかった、もう少し遅かったら俺って雷に焼かれてたよね

最近ちよいちよい死亡フラグが立ってるよな…おっと、早くここか
ら去らないと

結果が展開されてるからもたもたしてたらなのはとフェイトに見つ
かる

辺りを見渡すと数十m離れた所に隠れるのに丁度いいダンボール置
き場を発見

急いで走り寄ってダンボールをかぶる

こちら諒助、大佐聞こえるか？

ごめん、やってみたかったんだスネークごっこ

なんてふざけていたらなのはとフェイトの両名がジュエルシードを
発見したみたいだ

その証拠に金色と桜色の砲撃がジュエルシードを捕らえる

しばらくすると封印処理がされたのか光の柱は消え、淡い光を放ち
ながら浮かんでいた

というか音が凄いな耳がキンキンする

なんとか耳の異常も直りダンボールの隙間から様子を伺う

「そうはさせるかい！！」

丁度アルフがなのはに襲い掛かり、それをユーノのバリアで防がれた所だった

バリアに弾かれたアルフが俺から数mの所に着地した

「くそっ！…ん？このにおいは…」

しまった、アルフとは一回会ったことがあるから俺の存在が！

どうしようかと悩んでいたらアルフの前をユーノが通り過ぎて挑発する

「待て！」

目の前のユーノを追いかけていったアルフ

ふゝ、なんとかなったかな？

《ディバンシユーター》

《ディフェンサー》

なのはの攻撃を上手く防ぐフェイト

まじでなのはは素人か？簡単に空も飛んでるし、停滞もちゃんと出てる

フィアナの話だと空戦魔導師でもあれほど上手く出来るのはかなり上位ランクって聞いたけど

そうそうあんな風に目標に向かって高速移動もね

……………え！？

なのはとフェイト、二人のデバイスがジュエルシールドを挟み込む

「え？」

誰が言ったのか分からない戸惑いの言葉
その直後にジュエルシードは膨大な魔力流を撒き散らしながら巨大な光の柱を立てる

柱は雲に大きな穴を開けながら吹き飛ばす

「ぐえっ!!」

その時の衝撃により俺自身も吹き飛び壁に叩きつけられる

「ぐお、い、痛い… そうだあれはどうなったんだ…」

打ち所が良かったのか体に痛みが残っているだけで体は動く
這いずりながらもこの原因であるジュエルシードを探す

「止まれ、止まれ、止まれ、止まれ…」

見つけたときにはフェイトがジュエルシードを手で包み込んで暴走を止めている所だった

幸い吹き飛ばされたダンボールやらなんやらで俺の姿があちら側からは見えにくくなっている

ジュエルシードの暴走はフェイトの捨て身の封印でなんとか治まり、
気絶したフェイトをアルフが抱えて去っていたことで今回の騒動は
終わった

「フェイトちゃん…」

見えなくなつたフェイトに呟くのは
それを何か考えながらも見つめるユーノ

それから数分後結界を解いてその場から去って行く一人と一匹
そこでようやく俺が動くことが出来るようになったのだが
ブルルと携帯が鳴り、そのまま通話ボタンを押して電話に出ると聞
こえてきたのはフィアナの怒声
いつまで経っても帰ってこず、さっきまで連絡がつかなくなった俺
に腹を立てているみたいだった
早く帰って来いとのことなので俺はこの後に起こるだろう不幸にた
め息をしつつ走るのだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0780j/>

魔法少女リリカルなのは 魔法と怪盗とオタクと

2011年9月9日21時06分発行